
我流自権先

日下部時矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我流自権先

【Nコード】

N0083Y

【作者名】

日下部時矢

【あらすじ】

洋食屋の娘「倉持美古都」が、小説家「龍ヶ崎金字」の使用人となり、結ばれるまでの道のり。

序章

「これからお願いしますね、先生！」

私は精一杯の笑みを、無愛想な先生に向けます。

「……………」

先生はだんまり。……悲しいながら、いつもどおりです。

「なあに黙ってんだい金字。嬉しいくせにさあ。いいじゃないか、まさに花のような女学生が、しがない君なんかの世話をしてくれるようになるなんてさあ。羨ましい限りだよ」

宗司様は赤玉ポートワインをグラスにくゆらせながら、実に寛いだ様子で先生を諫めます。あ、確かに先生をよく観察してみますと、眉の傾斜角が少しだけ緩やかです。

「……ふんお前が勝手に決めたことだろう。俺は断ずるがこの小娘を買った覚えはない。それもこれも話を俺の知らぬところで進めたからだ」

元より早口な先生ですが、今は殊更、雨が降りしき堤防が決壊寸前の川のように、唇が韋駄天となっています。

「ははん？ 途中からは君も積極的に参加していたように記憶してるけどない。君が納得のいく環境で執筆できるようにするために、編集者である僕は君の生活を支えられればと、こうして使用人の手配をしたんじゃないか。まあもつとも、それは表向きだけどない。裏向きとしては、美古都ちゃんが小説の技術を学べるように、と。

……最近流行りの作家、『先書粒子』の下で学べば大衆小説を書くのに勉強になるんじゃないか？ という老婆心からさ」

一方、宗司様は余裕綽々と、可能な限り遅く発音します。元より独特な口調が、より強調される形となっています。

「それで俺の執筆に影響が起きたらどうするつもりなんだお前は」「大丈夫。君はノルマだけは達成する男だからねい。君を信頼できないほど、僕らは浅い関係ではないと思っっているよう？ いいじゃ

ないか、君もだつて勉強になる。そうなれば、七君ももっと喜んでくれるのではないかな？」

そう言つた宗司様を、先生は紅い瞳で、ギロリと睨みました。

「俺は明治どころか、大正生まれのような小娘を買つたなどとは、絶対に認めんからな」

告発します。

私は買われました。

…… いえいえ、誤解を与えるような表現になつてしまいました。訂正しましょう。

私はある男性と一つ屋根の下で暮らすことになりました。

…… これもなんか違うような気がしますね。もう一回。

私は、先生の、使用人となるのです。

これなら安心。間違つてゐる部分など、どこにもありません。

そしてここから、私の似非使用人生活が幕を開くのです。

・
・
・

雇・1

「美古都。これを三番のテーブルへお出ししなさい」

「分かりました」

私はお母様から受け取った、液体と固体の間を彷徨っている、黄色というよりも金色と称したくなるオムレツを、三番のテーブルへ持っていくきます。

「お待たせしました。こちら、オムレツです」

「ありがとうございます」

オムレツから漂う、卵とトマトソースが調和されているほかほかの湯気を堪能したお客様からは、自然な笑みがこぼれます。私が作ったわけではありませんが、お父様の料理が無言の称賛を浴びたような気がして、私まで笑顔になってしまいました。この喜びがあるから私は、喜びを栄養として、店内を笑顔のまま縦横無尽に駆け回ることができるのです。

そのまま厨房へと戻ると、お母様はまた私に料理を渡します。

「美古都。しっかりと顔を引き締めなさい。それと、テキ。こちらは七番のテーブルへ」

「はい！」

次から次へとお母様から料理を受け取り、私は店内を忙しく動き回っては、テーブルへと運ぶ作業に没頭していきます。

土曜日ともなると、お客様で店内は大変繁盛をし、従って学校も休日な私は、午前からお店の手伝いをします。お父様・お兄様が厨房に入れてくれないので、調理をしない私のすることと云えば、専ら接客です（断っておきますけれど、普段の食事なら、お母様の代わりに支度をしたりもするので、割と得意です。今すぐお嫁にだっていけると自称しています）。

フロアーは私が一人で回していますので、目も一緒に回ります。ただひたすらに、厨房とフロアーをいつたりきたりする獅子脅しの

ように単調、かつ忙しさを味わうのです。

しかしさすがは休日です。あとからあとから注文が湧いて出てきます。お昼ご飯も食べられず、朝からずっと働きっぱなし。私がお父様の作るライスカレーをご相伴にあずかれるのは、あと二時間ほどでしょうか。

しかし、忙しいのは身体には辛いですが、お店が繁盛することは素直に嬉しいものです。いくら「辛」くても、棒を一本足して「辛」せにすることができます。……とは言いますものの。

私は無償の奉仕をしているわけですが、少しぐらい、ほんの少しぐらいは、ご褒美の一つも欲しくもなるもので。……むう、両親を支えるのに、見返りを求めるなんて。この親不孝者め。

私は自らを諷めます。頬を軽く叩いて気を引き締めることにしましょう。ゴーン、ゴーン。店内に、重厚な音が響き渡ります。……

別に、私の肌がとても堅いわけではありません。ちょうど私が叩いたと時を同じくして、柱時計が鳴っただけです。

音の発信源に目を向けますと、午後一時。となりますと。

毎週この曜日、この時間帯になると、とあるお客様がやってくるのです。

ガチャリと重厚な音を演出とし、店内の扉を開いて入ってきたのは予想通り、麦わら帽子を被り、レンズに色のついた眼鏡を掛け、懐手が妙に堂に入っている和装の男性。

「いらっしやいませこんにちは。いつもの席は空いていますよ」

常連さん。私はこの方の名前を知らないのです、仕方なく心の中でこう呼んでいます。本当は、もっと別の呼び名をつけてさしあげたいのですが。味気がなさすぎます。

「ああ。すまない」

そう簡素の言つと、常連さんは私の案内もなしに、実に慣れた挙動で、奥にある一席へ座りました。室内だというのに帽子も取らず、そのまま椅子に深々と座ります。

九番テーブル。店の最奥に位置し、その席からだ店内の様子を

見渡せます。この席は、土曜日の昼頃だけは、いかに混雑を極めたいようとも、私はお客様をお通ししません。そしてそれは、我が店、【リーベ】の方針でもあるのです。

「……………」

私が常連さんにメニューを渡すと、常連さんはそれをじつくりと眺めます。

普通なら、お客様が注文を決めるまで他のお客様の注文を訊いたり、料理を運ばないといけないのです。なのに私はまるで、時が止まってしまったかのように、常連さんにただただ注目してしまいます。

この瞬間だけ、私の時は止まるのです。

麦わら帽子から僅かに見える、雪のように白い頬から、顎へと至る線。それは、人が死の間際に見せる一抹の強さと儚さを連想させます。そのようなシルエットを持つ男性。だといいますのに、確かにこの店へ来店し、生きることの象徴である食物を摂取する。

この矛盾に私は、どうしてか釘付けとなってしまうのです。

「ライスカレー……………ですね？」

「……………」

しかし、いつまでもこのままではられません。仕事ならいくらでもありますし、ここで立ち止まっている暇などありません。自らの時を再び流すため、私は呪文を口にしました。

それを聴いた常連さんは無言のまま、コクリと肯いてくれました。我が店にはメニューというものがあいながら、常連さんはいつものうして、ライスカレーだけを頼むのです。

はてさて、もうどれほど前から、このようなことが続いているのでしょうか。ここ数年、ずっと続いているように思います。

厨房のお父様とお兄様に注文を通し、その間にも完成したばかりのメニューを、他のお客様へお出しします。

そして仕事に没頭し、気が付いたら店内の喧騒もやや収まりつつある午後二時。

入口の扉が、またも開かれました。

「いらつしやいませ。一人様でしょうか」

私はごく普通にお客様の接客をします。そして、何気なくお客様の顔を御拝見しますと、

……うわあ。凄く、男前です。

ぴしっと着たスーツ姿は、本当に日本人なのか疑問になるほどに、まだお若いというのに、様になっています。インテリというものです。

「突然失礼。この店に、白い肌の男が来なかったかい？　もしかしたら、色眼鏡を掛けていたり、麦わら帽子を被ってるかもしれないけれどね」

顎に人差指の第一関節を当てながら、酷く思慮気にお客様は訊いてきました。……ええと、接客をした方がいいのでしょうか。それともきちんとお答えした方がいいのでしょうか。

悩んだ私は、取りあえず答えることに決めます。白い肌に、麦わら帽子……となると。

「は、はい。奥にいます、あの方でしょうか？」

私は店内の一点を見つめます。私の視線の先には、麦わら帽子を被った常連さんがいます。すでにライスカレーのお皿も下げましたので、テーブルの上に小さなメモ帳と、文鎮代わりに万年筆を置いているだけで、静かに瞑目しています。そしてその目が、少しだけ開かれました。

「……………」

あれ？　心なしか、恨みがましい視線を私に浴びせているような気が……。それでいて、なんとも哀しそうな表情もしています。

「あの、すみません、やっぱり私の勘違いだったようで——」

「ほほう。つまり、金字のやつはそこにいるというわけかい」

急遽路線を変更した私の引き留めも空しく、お客様はさつさと奥へ行きます。まるで事前に待ち合わせをしていたように、当たり前のように常連さんと相席しました。

「ふっふっふ。金字。こんな所にいたのかい。探したよう」

「……つく」

珍しいことに常連さんは、顔を隠すほど大きい麦わら帽子と、色眼鏡をはずしました。そして晒される、常連さんの有りのままの素顔。

——正直な話、常連さんの帽子を外した状態で顔を見るのは、これが初めてです。

常連さんは、処女雪のように白い肌、髪をしていて、そしてなにより、私を射抜く、紅い瞳が私の眼を惹きつけました。

お恥かしい話ですが、この時に私は……常連さんに心までを奪われてしまったのです。

二年生になってから一月が過ぎようとし、やや新しい学年にも慣れ始めた今日この頃。校舎へと通じる坂道をえつちらおつちらと上っていますと、うつすらと額に汗が浮かんできますが、風がすぐに吹き飛ばしますと、そのような痕跡など残りません。ああ風よ。なんて頼もしいのでしょうか。慌てた証拠など何所にもありません。私は家からずっと静かに歩いてきましたと言い張れるではないですか。咲き誇っていた桜や梅もすっかりと散り、もはや春というよりは初夏と表現した方が近いほど。世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし。最近習った和歌を暗誦したりもしてみました。私は春が好きです。和歌において花とあれば、それは梅か桜のこと。平安の昔から愛され続けている心は、現代を生きる私にも面々と受け継がれています。

どうにか嬰女へと近づく頃合になりますと、同じ学校に向かう生徒の姿がちらほらと増えてきました。……と、と。そんなことを悠長にしている余裕はありません。

嬰格高等女学院。名は体を表すと言いますのは、その通りだと私は思います。

キリスト教を広めるという名目のもと、現在の学院長によって設立されたこの高女も、現在では良家の子女が集まる学校として有名となりました。賢母良妻を目指して日々女性としての嗜みを修得するため、若き女子たちが励み合う場所。

もっとも今時、女性というものは家庭だけに留まるものではありません。職業婦人のような働く女性というものも、嬰女では多いに推奨しています。男性が軽視しているほど、女性は弱いものではない。もっともつと社会へ飛び出しても荒波を超えていくことができます。我らの手で、この日本という国を、女性によって導こうではないか。そういう校風です。

……と言いましても。

私のような、どうも女性的とはいい難い生徒も居てしまうことは居てしまうのです。言っていて悲しくなりますが。

教室へ着くとほとんどの生徒が着席をしていました。もうすぐベルが鳴るのです。なんとか身体を滑り込ませるようにして椅子に座り、息を整えているうちに、もう一時限目の先生が来てしまいました。

ちゃんちゃん。私の肩が、何者かによって突っつかれます。私はその主の目的に沿うよう、首だけを少しだけ横に向かせました。匂い袋から、甘い香りが漂ってきます。私はこの香りが大好きです。彼女の本質を象徴するようですから。

「ごきげんよう美古都さん。間一髪でしたわね。運がよろしいことですわ」

「あはは……お恥かしながら」

学友のキヌにそう答えます。すると私の隣の席にもいるもう一人の学友、ハヤマでがぴくりと反応しました。けれど彼女は^{ロボット}人造人間の最中ですので、それ以上の行動にはなりません。

「うふふ。本当に美古都さんは嬰女の生徒なのかしらね？ つくづく疑問になりますわ」

とても嬉しそうに私のことを責めてきます。一度調子付かせたらどうしようもありません。

「うっ……言い返すこともできない……」

毒舌なのは知っていますが、ここまで本心を突かれますと、人と言うものは激情するか落ち込むかのどちらかなのです。私は後者でした。

「お静かに。級長、号令をお願いしますよ」

「はい。起立。令」

国語の教師、ミセス真田の指示のもと、それまで少しだけ残響していたひそひそ話しもぴたりと止まり、すぐ授業の体制へと移ります。私もキヌも、身体に染み付いた一連の流れに任せます。——私

は今日も、いつも通りの朝を過ごせました。

そして一時間目も終わり、休み時間、私は風呂敷から教科書を取り出していると、さきほど私の肩を叩いた学友が、今度は立ち歩いて私の席へ近づいてきました。ミセス真田はとても厳しいので、授業中に手紙を回したとしても、目ざとく発見してしまうのです。授業中に私語でもした日には。……考えたくありません。そういう意味で、ようやく自由に話せる時間が到来してくれました。

「ごきげんよう。いつもは早くに登校しますのに、今日は遅かったですね。やっぱり食事処を経営していると、仕込みとかを手伝わされたりするもので？」

そう高圧的に言ってきたキヌは、私へ一通の手紙を差しだしました。私はささつと受け取り、すぐ机の中へ隠します。今日はあちらの番。明日は私から。

「ごきげんよう、キヌ。いえ、前から言ってるけど、実お兄さまと博お兄さまが下準備をするから、私はもっぱら接客担当だよ。それでもなんで遅れたかって言うと……あはは、少し、用事があって」「煮え切らない、か。ほうほう、どうやら嘘のようだな。大方、我自権先とやらの小説を読んで夜更かしをしたということだろうっけどな」

少々どころではなく言えません。ですから茶をお濁しています。だといいますのに、私の隣の席に座っているハヤが、無表情でその目は本に釘付けのまま、口を挟んできました。

珍しい。ハヤが自ら口を開封するなんて。……しかもいきなり核心を貫くなんて。

「……なんですって？ 美古都さん、またそうやって勉学に集中していない振りをしておいて、力を加減してわざと二位を取ると、そういう魂胆ですか？ 趣味で時間を潰し、学業を疎かにするような女性と、わたくしは思っていないくてよ。あなたはもっと机に向かって、小説などではなく、教科書を読むべきですわ」

「キ又に言われたくないもん。……いえいえ、私は本当に夜更かしを、」

それでも私は頑張つて態度を崩しません。だって悔しいんですもの。こんなにも簡単に、手の上で転がされるだけなんて。そうです、事実です。悪いですか。

「まったく。そういうった行動はおよしなさい。あなたは嘘をつけない性質なのだから」

セーラー服を翻すは中屋敷絹。私はキ又と呼んでいます。お友達の一人。

小説に出てくる女学生のような口調をしています。キ又はその通り、『少女の友』や『少女倶楽部』と言った雑誌を愛読書とし、『花物語』の単行本の発売を待っているような、典型的な今時の女学生なのです。

しかしこんな口調をしているのも、学校の範囲内でのみ。老舗呉服屋の娘として昔から厳しく躰けられているため、せめて学校ぐらいは好き勝手にさせてほしいと、あえて小説の世界では普通に生きている、「女学生」の演技をするのです。

それはいいのですが……呉服屋の娘なのにセーラー服とはこれいかに。やはり両親から「差服を着ろ」と口うるさく言われているようなのですが、キ又の決心は固く。頑として、学校では和服は着てこないのです。それどころか、私たちどこかへ遊びに出かける時もまず洋服。私たちは、キ又が自宅以外の場所で、和服を着ている場面を見たことはありません。

「お古都がわたしたちを出し抜くには、あと何年の時が必要なんだろうな」

和服を動かさざるは日下部隼。ハヤと呼んでいます。もう一人の、私の大切なお友達です。

道場の娘で、昔から男に混じって育てられたためにこうして男のような口調になってしまったのだとか。せめて女らしくなってほしいと高女に入れられたわけですが、結果はこの通り。ハヤとは対照

的に、こちらは家でも学校でも同じ姿勢を貫き通しているのです。

だからと言って、学校でも道着なのはどうかと……。キ又に頼んで改造してもらっているため、ぱつと見では単なる茶式部のようにも見える、不思議な服となっていますが。まだ嬰女は制服が義務付けられていないとはいえ、この恰好は目立ちます。まあ普通に和服を着ていても、暖かい季節なら常にたすき掛けはしているような女子です。袖が煩わしいのだと。その割には、振り袖を着たがっています。その辺りの感覚は、私と相入れません。

と、こんな見た目も中身もおかしな二人が、私の一番のお友達なのです。

本当、私もどうして一緒に居るのか分かりません。ですが、この三人でいる時間が、学校では最も長いのです。人付き合いというものは、真に不思議なものです、

「む。お古都からおかしな気を感じたぞ」

「あら美古都さん。今さら私たちのことをとやかく言うおつもり？
そういうあなただって今時、袴を着用しているではありませんか。
時代は洋服ですよ」

……顔に出るのでしょうか私。ほぼ同時にキ又とハヤから心の中を覗かれました。

「今時つてほどではないと思うんだけど……それに、私は袴の方が可愛いと思うし」

しかしそんな私の好みとは裏腹に、今年になって嬰女では、来年度から制服を導入しようではないか、という動きも見えているのです。現に近くの女学校でも既にセーラー服ですし、わが学校で和装の生徒が見られなくなるのも、時間の問題だというものです。

「あ、まずい。先生が来たぞ」

「あらいけない、ワタクシとしたことが」

二時間目は修身の時間。私は少し苦手です。少し憂鬱になりました。

雇・3

私が嬰女から帰り、家の扉を開けようとすると、違和感がありました。その正体はすぐ気が付きます。扉に『close』と書かれた看板が掛けられてあったのです。今日は定休日ではありませんし、なにか用事があるとも聴いておりません。お店を閉じるくらい大切な用事があるのなら、まず間違いなくお父様は私にきちんと説明してくれます。

少し不気味がりながら、唯一の店内へ続く扉を開きます。

すると、数日前にも来店なさった、スーツを着た男性が店内にいました。不思議なことにカウンター席でお父様と何やらお話をしていました。私が帰ってきたことに気が付くと、お父様はそそくさと厨房へ戻りました。

当然ですが、薄暗い店内に残されたのはお客様が一人。看板を仕舞っているだけあって、周りにお客様はいません。

「……………」

「美古都」

「どうしたのですか、お母様。この状況は一体？」

お父様と入れ換わりに、お母様が私の前に姿を表します。

「……………」

それこそ、苦虫を噛み切るよう……と表現したくなるほど、お母様は普段の冷静さを忘れ、しかしどこか悲しみも率いた表情のまま、私の肩に、その細い手を乗せました。

「この方から話を訊きなさい。でも忘れないで美古都。お母さんたちは、あなたを捨てたわけではありません。少しだけ、少しだけでいいから、この人の言うことを受け入れて……………」

そう言ったお母様も、先ほどのお父様と同じようなそそくさとした拳動で厨房へ入ります。

「……………」

なにがどうしたらこうなったのか、皆目検討もつきません。私はいつもと変わらず学校へ通い、そしていつもと変わらず帰宅しただけですのに。

「はは。お帰りなさい、お嬢さん」

まさに紳士といった風体で、お客様は私の前で、腰を折って挨拶をしました。

「ところでお嬢さん。こんな晴れた日に、内に籠ってお話するものなんです。ここは一つ、僕とランデブーと洒落込みませんか？ ああいや、とは言っても行く先は、あまり明るい所ではございませんがね」

仕方がありません。お母様もああ言っていたことですし、不安は大きく残りますが、この殿方についていくこととします。

行き先を告げた男性は、まずは歩いてすぐ到着できる距離にある公園まで私を連れてきました。この公園は先の震災の折、区画整理によってできたかなり新しい公園です。少年たちの遊び場となっているところがなんと和やかなところ。鬼ごっこをしたり、『やきゅう』というスポーツをして楽しんでいきます。

リボンシトロンを買ってくれた男性と共にベンチへ座り、絶えず私に話題を供給してきます。しかしその内容はおそらく本題とは全く無関係な、ちょっとした世間話ばかり。とは言え退屈なわけでもなく、ついつい引き込まれるような話術に、私はいつの間にもやうやう身体を纏っていた緊張の糸を切っていたようです。

「ははは、いやあ、それにしてもいいものですね、給仕服というもの。僕はメイドというものに目がなくてね。貴方はとても、給仕服を着こなしていらっしゃる」

お客様が褒めていらっしゃるのは、リーベで評判の一つ、制服のことです。お母様の知り合いに、こういった服のデザインを生業としているお方がいて、その方に頼んで仕立ててもらったとても可愛らしい給仕服です。私がお手伝いをする時は、この給仕服で接客を

します。

中世ヨーロッパを模した長衣。ハイウエストで腰をぎゅっと絞るため、身体全体が細く見えます（私みたいな体型だと、あまり強調したくない部分が強調されますが……）。スカートの裾はやや短めになっていて、その分、その下からレースがたつぷりと見えます。袖は広がっていて、なんだか提灯のよう。脚を覆うブーツは可愛らしい給仕服を一転、実務に耐えきるための道具なのだと強調します。この給仕服を見るためだけに来店なさるお客様もいらっしゃる……とかなんとか、ハヤとキヌから聞かされました。

「あ、ありがとうございます……」

着ているモデルが私というのも、なんだかくすぐったい話です。それでも褒めてくださるのは花恥ずかしいですが、同時にとても嬉しいとも感じてしまいます。ごく自然に、笑みが零れてしまいました。

「——いい具合に緊張も解けてきましたね」

「は、はい……」

男性が現実引き戻す一言を発したからこそ、やっと少し前の不安を思い出しました。

「御免なさい。貴女にとって全てが唐突すぎでしたでしょうから、少し遠回りをしてしまいました。それと、華麗な少女との会話を楽しめるといふ役得を楽しんでしまいました。ここで深く、お詫びを申し上げます」

仰々しく、お客様は若輩者な私に頭を下げました。男性なのに、こういったことを恥じと思わないのでしょうか。けれど私は軽蔑するどころか、むしろすがすがしくさえ思います。

このように、女性の機嫌を取ることに徹底するあたり、かなり『ナンパ』な方の方です。私のお父様も世間一般の父親と比べると優しいようなのですが、それにしあってこの男性は、度を超えているほです。

「僕は……そうですね、クロック宗司とでも名乗っておきます。い

え、自分の苗字が嫌いなものですので、少々の御無礼を許してもらいたい。翻訳の仕事や、小説の編集などを主に職業としています」

「はあ……」

いきなりそんなことを言われても、曖昧な返事をするほかありません。

「貴女のお店に^{リーベ}来たのはこれで二回目です。一回目は三日前の土曜日、混雑したリーベに来ました。覚えていますか？」

「はい。じょうれ……あの帽子を被った男性の方と同席していましたよね」

忘れるはありません。いつも一人で来店し、ライスカレーを注文して、店内を観察しながら、そして去っていくお方。そんな人と、親しげに話していたのですから。

「美古都さん。ものは相談なんですが、聞いてくれませんか？」

貴方が小説家になりたいと聞いたものですから、これは双方にとっても損の無い『取引』だと思っています」

「はあ……」

確かに私は小説家になるのが夢です。ただしそれは、とある人の影響であって、便宜的にそう言っているだけなのですが……まあ間違っていないので、否定はしないでおきます。

「それなら、是非会って欲しい人がいます。今から、そこへ行きま

す」
そう言っ

て立ち上がった男性に、私は付いていくことしかできません

そして辿り着いたは、壁が蔦で覆われてしまっている、とてもとても大きな洋館。

なんでしよう……西洋のファンタジーといえますか。烏がカーカーとウルサク騒ぎ立てても、なんの違和感もございません。玄関口に足を踏み入れれば、埃と蜘蛛の巣が歓迎してくれる大広間が待ち受けていそうです。できることならば、このまま踵を返したいほどです。

「龍ヶ崎金字——これから貴方に会って貰う、リーベの常連さんのことなだけれど——が、小説家だってことは知っているかい？」
そして館を見た瞬間、今まで紳士然とした態度が、途端にがらりと豹変。主に、親しみやすい方向に、です。私が怯えたのを見計らったかのように。

「んー、折角女学生とこうしてお話ができるのに、堅苦しい雰囲気を作りたくないからねい。こちらが僕の本性なだけれど、仮面をはずし、こちらに切り替えてもよろしいかい？」

「問題なんてありません」

どうしても、年上の男性から敬語を使われると委縮してしまいます。少し（どころではないかもしれないかもしれませんが）特徴的な口調を除けば、普通に話してくれた方が、氣を楽にできます。

「そうかい。ならよかったよう。それで金字のことだけれど、知っているかい？」

「いいえ、知りません」

ああ、お店へ来た時には、いつも人を観察していたのは、そういう理由があつて。【なんてことのない平凡な物事を描写するには観察眼ともいうべきものが必要なのです】と、あの方はおっしゃっていました。同じことなのでしょう。

宗司様は呼び鈴すらも鳴らさず、ずかずかと洋館へ歩を進めます。

「家人は一人なのに、大きな家だよない本当」
大きな館に、一人佇む男性の姿。

「……………」
私は、宗司様には決して見えないように、ほんの少しだけ表情の筋肉を緩めます。そして、すぐ何事もなかったように、無表情に戻しました。

掃除すらされていないのか、大方の予想通り、至る所が埃だらけ。足が届く範囲は鮮やかな赤い床がその姿を見せていますのに、普通に廊下を歩くだけでは決して踏まないであろう箇所はくすんだ凝固した血液のようになっていきます。

宗司様のエスコートにより通された応接間はかなり綺麗に整えられていました（ほかの場所に比べたら、の枕詞が挿入されますけれど）。

「僕も部屋をクリーンにしてみたんだけど、悲しいかな、どうもあまり上手くない。すまない、汚い屋敷で。本当はカフェにランデブーでもしたかったんだけどない」

「いえ、それはいいのですけれど、これはいったい……………」

「もう暫くだけ待ってて。ちゃんと説明してあげるから。本人が凱旋してくれないとどうしようもないからねい。ささ、ソファに腰掛けて。少なくとも、今は貴女がお客様だから」

宗司様は水道からやかんに水を組み、ガスコンロの火をつけました。

私のクラスでお金持ちと言われている学友でも、このような設備が整っていないことが多いのですのに（我が家は洋食店を営んでいるくらいですから、私は見慣れています）。

「成金趣味の家だよない、ここは。ま、建てて数ヶ月もしないで一家が蒸発しちゃうなんて、世の中には間抜けな話もあったものだよ。だからこそ、金字がねじ込まれたわけだけれど。……………あ、僕は少し離れたいから、火の元を注意してくれかい？　また地震でも起きたら、笑い話にすることすらできないしねい」

昼時に起きた、あの大地震のことは今でも忘れません。そして一生忘れることはできないでしょう。あのたった数時間で失ったものは、我が家とて大きすぎました。

「はい、大丈夫ですよ」

「ありがとうございます。これで心おきなく、悪霊を現世に呼び出せるよう」

「はははと笑った宗司様は、そのまま部屋を飛び出していき、そして数分もしないうちに帰ってきました」。

当然、あの『常連さん』を率いて。文字通り、背中を押してのご登場です。

「……なんのつもりだ、宗司」

常連さんは、一度だけ私に視線を寄越した後、憤怒の表情で宗司様を睨みます。

「なあに、男だけのティータイムなんて、色気がないにも程があるだろう？ だからここは一つ、一輪の儂く、しかし向日葵のように如実に存在感を示す花を咲かせよう」と――

「そういうことを訊いているのではない！」

その怒号は、弱々しくはありましたが、迫力そのものは、地に轟くといった風情でした。

「宗司、ことと次第によつては――」

「どうするといふんだい？ 腕力でも口でも、……立場でも、僕に敵うはずがないだろう？」

男性のその言葉が切っ掛けに、常連さんは眉間に眉を限界近くまで寄せながら、それでもソファ―に腰掛けました。

「お騒がせしたね。この通り、自分の思い通りにならないとこれだから」

宗司様はソーサーを私と常連さんの前に置き、その上のティーカップに、紅茶を注ぎます。

「粗茶ですが。……って言いまわし、紅茶にも使っているのかな？」

しかしそれは謙譲というものです。俄かに香り立つこの紅茶。：

……すみません、良い香りということ以外分かりません。大人の男性二人を目の前にして、背伸びをしてしまいました。日本茶ならまだ分かるのですが、紅茶となるとお手上げです。ああ、洋食店の娘ですのに。

「さて、僕がどうしてこの場を設けたのか、もう気づいているだろうけれど……」

「はい」

どつしりとソファ―に腰を落ち着けた宗司様が、静かにそう始めました。隣にいらつしやる常連さんは、真下を向いたまま、石のようになっっています。

「あ、先に言っておくけれど、こいつのことは漬物石みたいに思っ
ておいてね。連れてきておいて莫迦な話ではあるにしても」

「……………」

もう宗司様が何を言っても、常連さんはなんの反応一つもしませ
ん。

「こいつは龍ヶ崎金字。しがない小説家さ。真面目に書いた小説は
全く売れないし、全く名も上がらないというのに、手慰みに書いた
小説が、女学生に飛ぶように売れるているような、そんなおかしな
奴だ」

龍ヶ崎金字。龍ヶ崎金字。リュウ、ガサキ、キンジ。

これが私と、『龍ヶ崎金字』様の初顔合わせですか。

「そんな金字なんだけれど、作者本人がアルビノ体質なせいで、滅
多なことでは表に姿を出したとがらない。そのせいで神秘に包まれた
作家としても評判があつたりして……ってこれに関しては、もしか
して女学生である貴女の方が詳しいかな？」

「あるびの、体質？」

「金字の肌が白い理由だよ。身体には色素っていうものがあつて、
僕たち日本人は大体こんな色合いをしているのだけれど、」

宗司様は自分の手のひらを開いて私に見せました。男性にしては
ほつそりとしていましたが、それ以外に特筆することなどない、普
通の手です。

「金字は生まれつき、色が弱いんだ。肌や髪の毛が僕や貴方のような
色をしているのは色素のおかげなのに、金字はこの色素がない。
そのせいで肌は白く、髪が金に近い。目が赤いのは……これは人間の
アルビノの中ではちよつと特殊らしいねい」

「人間以外の？ 動物にも、あるびの……はいるんですか？」

「自然界の動物では割といるんだよこれが。赤目に白肌。ヘビとか

イタチとかは有名な。そういうアルビノの生物って、神聖視している国も結構あるんだ。多くは神の使者だとか。わが国だと、山口県あたりではシロヘビを信仰の対象としているようだね。旧約聖書ではノアがアルビノという説もあるらしいし」

「特異であるとは言っても、世界各地で見受けられる、のですか」

「……そうはいつても、日本は島国で、排他的であるから。自分と明らかに異質な者を除外しようとする。だから金字のことをまともに知ろうともしない人は、まず金字を不気味に思うものだけだ……貴女はそうでもないようだね？」

ふむふむ、宗司様の言う通り、私は先生に嫌悪感はありません……というよりはむしろ、ある種の神々しさまで覚えています。

それもこれも小説の読みすぎでしょうか。【空想の世界に耽っているから現実には影を追いかけてしまう。それが古今東西、若者の悪癖です。】あの方がおっしゃっていたことは、私にも当てはまっています。

「これもハイカっている今時の女学生ならではの感覚なのかなあ。数十年前、産まれたばかりの金字を見た親族は、大半が不気味がつてたんだってさ。けれど、ちょっとした高名な占い師が『今度産まれる子は富をもたらす』などと言ったから、間引きはされなくて済んだのだと。龍ヶ崎は占いを強く信じる家系だったからね。そして金字は生かされたのさ。ただし、産まれることと育つことは全くの別物なんだけれど」

「……………」

常連さんは、自分の来歴を他人の口から話されているというのに、黙ったままです。訂正するようなものはない、ということでしょうか。

「で、龍ヶ崎にとって、生きてさえいれば存在価値のない金字は、蒸発した親族が建てたこの家に幽閉されたってわけさ。やることなく、日がな部屋に籠っては、小説を書いて過ごしている。少しの使用人がいるから、なんとか生活はできるだけだね。以上、説明

終わり」

もつと突っ込んで言及してくださいと言わんばかりに、唐突に話が終わりました。

「……………。龍ヶ崎様のことを語るために、私をランデブーに誘ったのですか？」

どうやら、私にもつと深く乗り込んだ話に引き込またいようでした。なので私は、宗司様のそんな思惑に従います。そして宗司様は、私にしか聞こえないような小さな声で呟きます。

「……悪くない相談だとは思っけどねい？ リーベ、借金があるだろう？ 震災の折り、店の再建でかなり大損を喰ったという話だ。

女学生向けに柔らかく言えば、『借金取り』な怖い男たちは、貴方が学校に行っている時間に来ているようだね。知っていたかい？」

そんな話は聞いたことがあります。確かに先の大震災で、リーベは一度潰れました。しかしお父様はどこからか資金を工面し、て、再建、を——ああ、つまりはそういうこと。

「僕は金字の財布の紐を握っていてね。無駄遣いはさせないでいるのさ。このお金でやりくりさせているわけだ。最近の金字はまた更に人気が上がってきていてね。少しだけ余裕が出てきたのさ。そうだね……具体的には、貴女の家借金を、現金で払っても十分に余るくらい？」

。

「正直、貴女のご家族はともいいい人たちだから、どんなことがあろうとも貴女を売る様な真似をしないだろうけど。自分の身体に代えても貴女を守りきる覚悟はあるだろう。……しかし、死地に向かわせなくてもいい方法があるなら、やらない理由もないとは思わないかい？」

田舎の方では、私と同年ぐらいの女子が身売りされているとも聞いております。私だって、知らない・分からないでいられる立場にはいないのかもしれませんが。

「僕は嫌だなあ。穢れなき乙女が色町に飛ばされるのを黙って見るだけなんて。……世の中には、そんな姿を見て大喜びをするゲス野郎もいるとはいえ、ね」

「……………」

宗司様の言葉に龍ヶ崎様は、そして発言した本人の宗司様ですら、苦々しい表情を隠すことができないでいました。

「それで、私ができることは？」

善意で肩代わりしてくれる……という話ではないでしょう。たった今宗司様が開かしたように世間とは裏があるのです。宗司様の言わんとしていることは私も薄々と気づいています。

「偏屈者でねこいつは。家に閉じこもってなきや執筆できないくせに、使用人に難癖をつけやがる。報酬をはずんでいても、暇を出されるのが後を絶たない。今は三食の用意だけを、知り合いに頼んでいるような状況さ。だったら、一人の女性に、ずっと金字を管理してもらった方が、引き継ぎなども煩わしくないし、金字にとってもいい影響を与えるかなって。編集者として、なにより親友として、さ」

金を出してやるから、買われる。

言い方を悪くしてしまえば、そういうことですか。

「……あれ？ そんなにお給金を払えるぐらい人気がある作家なのですか、龍ヶ崎様は」

そもその根本的な疑問が、私に湧いてきました。

だって私が文通している知り合いは、「物書きというものは人気者であるうとも日々を暮らすのでさえも冷や飯を食わなければ立ち行けないのです。物書きの冷や飯喰らいとはなるほど巧く言い表したものです」とおっしゃっていましたが。事実そのお方の場合、全く知名度が在りませんから、印税などほとんどないに等しいでしょうし。

「ん？ 『先書粒子』と名乗ってるね。もしかしたら知っているかな？ 『せんしよつぶこ』などと読まれることも多いんだけど、『さきがきりゅうし』と読むのが正しいんだ」

「し、知っています！ 私のお友達が誤解をなくすため、草の根活動をしていますから！」

ま、まさか、龍ヶ崎様が！

先書粒子とは、今をときめくエス小説の書き手。私の女学校の中でも、先書粒子の連載を楽しみにしている人はかなりいます。その

中でも、キ又は先書粒子の大ファンを公言しているぐらいです。むしろあの口調は、他のどのエス小説でもなく、先書粒子様の小説に出てくる主人公そのものの真似なほど。キ又ほどではありませんが、私やハヤもよく読んでいたので、これはもう、驚かないはずがありません。

「わあ、すごおい……あれは龍ヶ崎様のものだったんですね！」

「知っていたかい。流石、副業の方では知らぬ者はいないねい。…

…ふつ。女学生限定で」

「……笑うな宗司」

借金があることを吹き飛ばすほどの思わぬ衝撃に、私は憧憬します。意識せず、目に熱を点けてしまいました。

先書粒子として執筆されたお話は、それこそ私たちと同年代の女子が書いているのではないか……というぐらい、リアリズムに溢れているのです。それがまさか、まだお若いとはいえ、大人の男性が書いていたなんて。

「女学生の夢を壊すようで悪いけど、大半の少女小説家は男だったりはする。それにしたって、僕は金字のことを、無垢なる女学生を騙す男、と表現しておくよう。こいつの繊細な描写はあまりに女々しく、そこらの男じゃできるはずがないんだ。詐欺だねありゃ。その証拠に、女学生たちにとっても評判がよく、大人には批判される。売れ筋も肯定しているね。そういうわけだから、先書粒子は小説家の割には荒稼ぎしてるわけさ。使用人一人に少々金額をはずむくらいこいつは痛くも痒くもなかったりする。それにどうせ、女を手籠にするような甲斐性はないさ」

「て……」

そのような言葉に、私は顔が火照るのを感じました。

「うんうん、恥じいつて赤くなる女学生はやはりいいねい。どつかにいる、男のくせに肌が白くて赤が目立つ誰かとは天地の差だよ」
「貴様喧嘩を売っているのか」

私の顔よりも更に赤い瞳で、龍ヶ崎様は宗司様の胸倉を掴みまし

た。それでも「まあまあ」と落ち着いている宗司様を見る限り、これは日常茶飯事、二人の付き合いなのでしょう。

「貴方も、先書粒子は好きなのかい？」

「いいえ。あまり」

「お、おやあ？」

……まあ、読んでいるから必ずしも好きとは限りません。周囲と話を合わせるために読んでいる面もあります。私も、他にも好きなエス小説はありますし。

「本の向こうに生身の人間がいる実感ができたから、驚いているんですよ」

私がそう言うと、龍ヶ崎様は少しだけ嬉しそうな顔をしました。

……好きではないと言われて、嬉しがる。いやいやで副業をしているということでしょうか。

「こほん。……まあ」

咳払いをした宗司様は、思慮気に顔を歪ませます。瞬きをしてしまっていたら気づけないほど一瞬だけ陰惨な笑みを浮かべた後、また先ほどの表情に戻りました。

好ましくない、顔でした。

「とある筋から聴いたけれど、貴方は小説家を目指しているのだから？」

とある筋。……実お兄さまですか。それ以外の人物には明かしていませんから確定です。それこそハヤとキヌにも。実お兄さまにしたって、私が執筆している最中に突然部屋に入ってきたからばれてしまったわけで。そして、聞かれたら答えてしまうその明け透けな態度。帰ったらどうしてくれましょう。

「頼りないとはいえ、こいつもそれで食っていける程度には実力のある小説家のはしくれ。なかなか、勉強になると思わないかい？ 表向きは使用人として屋敷の管理をし、裏向きは書生として金字から技術を学ぶ。あまり悪い条件とは思わないけれど？」

世の中には裏があります。ですから宗司様は、言外にも大きな理

由が隠して、私をそのような身分のしたいのです。……しかし私にとって、この提案は「知恵の実」でした。

「――ま、あとのことは君たちに任せるよう。結局は君たちの動き次第だしねい。今日のところはこれで僕は帰るけど、しっかりと考えておいて」

「え、だから、そこまで唐突に？」

そう言った宗司様は、私の制止の言葉も聴かずに、つかつかとリビングを出て行ってしまいました。残った者は、私と龍ヶ崎様。

「そのー、……どうしましょう」

固く瞼を閉じたまま、なのに空気だけで私を睨んできます。そうだとすると、この現状を打破しないのは嫌でした。

折角、初めてこうして、二人きりになれたのですし。

人と人の初対面は、大事にしないといけないのです。

「……宗司の野郎め。そこらにいる洋食屋の娘を連れてきおって」
「やっと口を開いたと思ったら、そんな辛口な言葉の数々。これが龍ヶ崎様から受けた言葉。こんな辛辣な言葉、私はこれまで受けたことはありません。おそらく、絶対に忘れることなんてできないでしょう。……いえ、忘れてなんて、あげません。一生、胸に刻みつけたままです。私は恨みを忘れないのです。」

「本当に買われないのか。なにが楽しくて女中などに身を墮とす」

「楽しくなんかありませんよ」

「ではその笑みはなんだ」

「……はい？」

私は、自分の顔を無造作に撫でます。手に伝わってきたのは……目尻の辺りに集まったお肉と、口角の上がり方。いけません、私は顔を引き締めます。

さて、私が起こすべき行動は。

こんな運命、いくら経験をしたと思ってても、多生を過ごそうが得られない、貴重すぎるものです。これを受けるか受けないか……これによって、私の人生は変わってしまう。それぐらいの予感が、

私の胸を強く打ちます。

「小説に捕われた、私の人生の滑稽さに、ですかね」

その夜。私はお父様に呼ばれたので、居間でお話をします。どうして呼ばれたか……それは容易に想像できました。

「美古都。おめえ、あの男の言うことを聴くつもりじゃねえだろうな」

やはり。寸分の違いありません。

十数年も一緒に暮らしていると、これが普通なのだと思ってしまうのですが、どうも私のお父様は、とても『甘い』性格をしているようなのです。一般的な父親というのは、厳格、頑固、融通が利かないといった怖い存在。しかしお父様ときたら、私の我儘としか言えないようなお願いも、よく聴いてくれます。

……特に顕著なのが、つい先ほど知りました、先の大災害により家が潰れて余裕というものがなくなっていたのに、それでも私を女学校に入れたままなことでしょう。私は将来の夢のためには、『学』が必要なのです。退学したくはありません。

そんな優しい、私のお父様。だというのに。

「お父様。私は、あの方の使用人になろうかと思えます」

客観的にはどう思われようと、お父様が私を守ってくれている以上、ここにいる親不孝者ときたら、その気持ちを裏切ることになります。

「おい。そりゃあどういうことだ」

お父様は怒りました。その反応は極めて当然です。無理はありません。断るとばかり思っていた娘が、まさか受け入れてしまうなんて。売られて喜ぶ娘はいないでしょう。

「あの常連さんは、先書粒子と呼ばれる小説家なのです」

「……なんだ？ その、サギガキなんたらっていうのは」

「女学生の間で流行っている、とても有名な小説家です。私も作品を愛読書の一つとしています。……あくまでも、一つ、ですけど。」

でも、実力はお墨付きです」

「それが、どう関係あるってえんだよ」

さて、ここからが重要です。

絡め手を使う……そういう考えもありましたが、お父様はそれでは納得してくれないでしょう。ここは真正面から向き合うことにしました。

「少し待ってて下さい。口で説明しても、納得してくれないと思いますので」

私は一度部屋に戻り、机の引き出しにて厳重に保存している原稿用紙の束を取り出します。居間へ戻り、出て行った時と同じ面持ちで待ち続けていたお父様の胡坐の前に、私は原稿用紙を献上します。

「なんだあ、これは」

「私がこれまで書いては破り、推敲し、苦悩の末に作りあげた一作です」

しかしこうしてみるとかなりの量です。文庫本三冊ほどの分量。これほど私は執筆したのですね。しかしあの方は、これ以上の冊数を、数か月もしないうちに書きあげるのです。それはもう、私からすれば尊敬の一言以外はいらないほど。

「ですが、未完成です」

「……こんなに、あるのにか？」

「冗長すぎるのです。頭に浮かんだことを際限なく詰め込んでいるせいで、なにを主張したいのか、まるで要領を得ません。今の私は、この程度の実力しかないのです」

時間を掛ければ量を書くことは誰にだってできます。しかし重要なのは、まとめ上げることなのです。短い文脈の中で、最大限の意味を込める。それこそが【あの方】の目指す境地。敬愛する私は、少しでもその背中を追いかけたいのです。

「今まで黙っていました。私は小説の勉強をしたいんです。先書粒子といえ、売れに売れている人気作家。こんなお人に弟子入りするも同然の機会なんて、もう訪れてないでしょう。それを元に勉

強をすれば、私はもつと早く成長できる。あわよくば、あの人の傍に近づく権利が与えられる。そう思ったのです」

私には、ある夢があります。とある人と一緒に願った、夢が。
我自権先。

この人こそ、私が尊敬し、また目指すべきと思っている小説家。先書粒子と違い、我自権先様は、私が真に好きな作家なのです。書く小説は、全てが流麗。優美で耽美。人間だけでなく、万物の本質を抉り取るうとする、その野心的な試み。

……欠点としては、知名度があまりにもないことでしょうか。どうも賛否両極端というか。好きな人は好きなようですが、嫌いな人はとことん嫌い。そして、好きな人はかなり少数であること。少なくとも、私の周囲で我自権先様を好きな人はいません。

【小生は誰にも理解されません。それでも構わないのです。見返りなどいりません。ですが貴方の渾身の作品が読めるとしたらこれを上回る幸福など三千世界にありません。】

この方の高位に報いるため、私は小説を書くのです。それには、未熟なものでは失礼に当たります。力のない私ですが、少しでも、少しでも一歩を進みたいのです。

「私は、約束を叶えたいんです。ですから、決心は揺らぎません」
一点の曇りもない、生の感情をお父様に向けます。

お母様はお父様の意向には逆らわず、お父様は私の心からの我儘には背けず。お兄さまたちには刃向かわせないようにしておいて。

——こうして私は、表向きは使用人として。裏向きは弟子として。家族公認。龍ヶ崎金字様のお屋敷に、仕えることとなったのです。
――。

師・1

「ふうわ、ああ……」

うつ眠い。最近は特殊な事態が続き、そのせいか思いつくことが多いので、原稿用紙に向かう時間が多くなってしまい……。結果として、文字数と睡眠時間が反比例してしまいます。

欠伸を噛み殺しながら、取りあえず意識がしゃっきりしているうちに、これだけはしてしまおうと、リビングへ入ります。隠れてお昼寝をしようにも、まだ九時を少し回ったあたり。休憩するには早すぎます。

先生はこの部屋には滅多にお入りになりません。ですから先生のいない今、カーテンは開け放されています。あまりいい天気ではありませんが、人工ではない明かりが部屋を満たすのは、やはり世界のあるべきまま姿です。

この館は太陽の光が苦手な先生のために、暗さを維持できるよう工夫されています。……ただまあ、そのように設計されているわけでもなく、単にカーテンで窓のほとんどを覆っているだけなのです。おかげで館は何所へ行こうが、夜です。それこそ天気の良い日なら、昼間でも行灯は必要かもしれません。今のところ、私がお屋敷へ伺う日に雨が降ったことがありますから、少し憶測を交えてみました。

私が使用人としてお屋敷に滞在するのは、唯一の休日である土曜日のみ。日曜日は校長先生の引率のもと、ミソジスト教会へお昼すぎまで牧師さんのお説教を訊くのが通例ですので、丸一日こちらにいられるのは、土曜日しかないのです。

では、土曜日に私がすることと言えば。

使用人としてお給金を貰っているからには、やはり使用人として働くのが筋というものです。従って、土曜日の太陽が上がっている時間は、使用人の他何者でもない仕事をして過ごします。それはも

う、お屋敷に関することでしたら、全てが職務に含まれていると言
い切れるのです。お掃除にお洗濯、はたまた先生のお食事の用意に
至るまで。

リビング掃除を終えます。今度は、手入れされていない、野放し
にされたままなお庭の掃き掃除をします。どうも私以外にも雇われ
ている本物の使用人さんは、先生のお食事の用意と、目に見える範
囲の掃除をするぐらいしかしないようです。おかげでお庭は荒れに荒
れています。せっかくこんな立派なお屋敷なのに、家の顔である
お庭がこんな様では隣家から不気味がられても仕方有りません。私
とて最初にこのお屋敷へきた時は、引き返そうかと思ったのですし。
そうしないで大正解でしたが。

「のどかなりや 春の空 花はあるじ 鳥は友……」

ふと鼻歌を歌いたくなる気分というものがあります。普段なら天
気のいい日に啓示が降りたように訪れるのですが、曇りな今日でも、
口ずさみたい気分に襲われました。これといった理由はありませんか
ら、突然というわけでもないんですけれどね。今日は十五日。

ふと、私の視界に映ったものを見て、私はどうしようかと考えま
す。

なかなか大きな花壇があるのですが、雑草たちがそれぞれの領土
を争っては、根っこを偵察に向かわせている始末。これでは種を撒
いても、すぐ孤立無援になってしまいうでしょう。まずは土から手入
れをしないといけません。週に一度だけでは到底時間が足りません
ので、暇であれば学校の帰りに寄りながらも作業を進めましょう
か。ああ、そうすれば、よりこのお屋敷へ来る口実となりますね。
私はお花が好きで通していますし。……あ、これは本当のことです
よ。というより、お花が嫌いな女性がどこにいましう。

そう長期的な作戦を立てながら早々に庭掃除を終えた私は、次は
先生の寝室へ入りました。

シーツをふあさあと舞い上げます。そのままベッドに覆いかぶせ
て敷こう……としたところで、開け放しにしておいたドアがバタン

と閉じました。怪奇現象とでも思いましたが、まあそんなことはありません。押し花のように潰して乾燥されたような声が聴こえてきました。

「暗くしろ」

もし泥棒さんがこの館に間違つて侵入したとしても、この怪奇音を聞いたら、泣いて逃げ出すのではないでしょうか。か細い割にやけに迫力のある声です。普段声を出していないからこうなってしまうらしいです。

「はい先生」

私は、龍ヶ崎様のことを『先生』と呼ぶことにしました。何故私がそう呼ぶのかは説明したことはありませんが、「先生」と呼ばれて満更でもなさそうな表情をするので、なんの問題もなく多用をすることにしています。

先生。ああ、なんとうつとりしてしまう響き。

私の好きな作家、我自権先様の小説では、学校を舞台としているわけでも、恩師と弟子という間柄でもないのに、「先生」という呼称を使うことが多々あります。その影響といえますか。私だってキ又ほどではありませんが、影響は受けやすい性質なのです。

我自権先様に、敢えて先生という呼称を使う理由はなにか訊いたら、「大したことのないちっぽけな人間でも先生々と崇められていれば知らず増長してしまうものです。小生はその夜郎自大を文字で『描』きたい」と返ってきました。我自権先様は男が自惚れ、女に溺れてしまい、結果として身を落としてしまう短編を多く発表しています。我自権先様は、その一点を突きつめたのでしょうか。そんな我自権先様を、陰ながら応援することしかできません。

私はカーテンを閉め、部屋を出来る限り暗闇にしました。これでこの部屋は、まるで草木も眠る丑三つ時。……とは言いますが、私は夜遅くに先生の寝室を訪ねたことはないですから、夜になるとこんな感じですかね、ぐらいの感想しかありません。

この部屋で、どんな夢を見ているのでしょうか。

少しだけドアを開け、確かに暗いことを確認した先生は、ずかずかと部屋に入ってきます。

「……えっと」

よくよく考えますと、先生がどうしてここに来たのか、全く思い当たりません。普段は食事すら催促してこないのです。雇われの身としてはもう少し『云々をしる』と命令してくれた方が、いつの間にか機嫌を損ねていた、なんてことが防げるでしょうからまだ気が楽です。

そう謎に思っていますと……、

先生はおもむろに、私の顎を左手の人差し指でくいと持ち上げました。

それはさながら、これから口付けを交わす、前段階のように。

・

「え、な、ななな、な、に……を？」

「じつとしている」

寢室・若き男女・顔を上げるこの状況。

お父様には悪いですが、これが何を隠喻しているのか分からぬほど、私は箱入りでもありません。少女が接頭語にならない小説を読んでいますと、なんとなく分かってしまいます。それこそ「今時の若者は」と蔑まれそうですが、私とてそういうことに興味が、なくもないのですから。だからこそ、五秒先の予測が簡単にできてしまう先生の行動に、かえって私は何も考えることができなくなってしまいました。ああ、無知でいられたら、先生がただ私を見つめているぐらいにしか思わないでしょうに。

紅い瞳は私の心を吸い込ませ、白い肌は私の心を同じ色に染め上げる。どんな表情も浮かんでいない顔を見れば見るほどに私は、龍ヶ崎金字という男性の虜となっていくます。

華奢ではあるけれども、確実に男性であるという誇示をする長身。役者の花形のような、あまりに整った容姿。強烈すぎるほど、男性という存在を、私に知らしめます。

それこそ私の人生でまともに知り合った男性など、親戚や近所付き合いを除けば、先生ぐらいしかいないのです。かつてないほど、私は身近に男性を感じてしまっています。……宗司様は、私の中では近所付き合いに分類されています。それ以外にたくありません。先生は私の頬を撫で始めました。睦時のように甘いものではなく、むしろ好奇心旺盛な赤ん坊がなににでも手を出すような、そんな手です。

——正直、その間に何をされたのか憶えていません。唯一憶えているのは、白魚のように滑らかな手の中に、硬い感触があったことだけです。おそらく、ペンだこでしょう。先生の体の中で、唯一小

説家であることを示す証拠です。

気がついた時には、もう先生は私から離れていました。今の一連の出来事に、耳までばおつと熱くなるのを感じます。

「――」

本当は「何をするのですか」と言いたかったのですが、声が出ません。さらに腰もへなへなと碎けてしまいました。主人の寢床を荒らすのはいけないことと思いながらも、先生のベッドにぺたんと座り込んでしまいます。私は、男性に免疫がないのです。あるわけないです。

「……………」。ふん生娘の肌の感触を知りたかっただけで他意はない。まあこれはこれでいい資料にはなったぞ他の生娘には頼めないからな」

口をばくばくさせる私を見て、先生は自ら理由を明かしました。

……生娘生娘と。確かにそうなのですが、『子供』ということを強調されているみたいで嫌です。しかしそんな私の気持ちなんか知ったものかと言わんばかりに、先生はへたり込んだ私を見下ろしています。その目は、相変わらず紅いままでした。顔も、負けじと赤いものです。

「――もう先生ったら。私にベッドメイクをさせたくないからって、私は当てずっぽうに理由をあげます。先生は「ああ」とやる気のなさそうに同意しました。

「締めきりが近いのでしょうか？ 私で遊んでいる暇なんてないですよに」

確か宗司様のお話では、先生はここ数日締切間近に身を置いていたのだといます。少しでも書いてほしいのに、最近はめつきり筆が遅くなって……そう嘆いておりました。

「詰まっただよ。貴様のような年頃の肌に俺は触れたことはない。どう表現していいのか悩んだ。ふん。今で文は浮かんだ」

ここまで唐突で衝撃的ではありませんが、先生が私に頼みごとをする時は大抵こうなのです。

「それで触られた私の身にもなつてください。なにをされるか、とても怖かったのですよ」

「小娘に介護されなければならないような呆け老人ではない。また『怖いこと』をされたくなければこのような愚かなことはもうしないことだ」

「それとベッドが乱れていることは別の問題なのです。先生だって、綺麗に整ったベッドの方が寝心地もいいでしょう？」

「貴様のように軟弱ではない。寝ようと思えば堅い床の上だって眠ることができる。現に今までそうして寝てこれたのだから」

お小言を右から左へと流しつつ、私はシーツをピンと敷きます。

「先生がおっしゃっているのはキャンであつて、ウォントではないでしょう」

「宗司のように横文字を用いおつて。これだから今時の女学生は」

「その女学生を喜ばせる小説を書いているような方には言われたくないです」

シーツを取り替えるだけでこの始末。これで私がお部屋の掃除などをしようものなら、「俺の部屋を荒らすな」と大騒ぎ。今日のアレは、随分と特殊な場合でした。

どうも先生は、この屋敷を私が歩き回るのが好ましくないようです。だからこうして度々脅しをかけてきます。主人が否定するのなら使用人の私としては先生に従うべきなのでしょうが、私は先生でなく、お給金の受け取り元である宗司様から、先生の面倒を見るよう大義名分をもらいましたので。

ああ、悲しい私。先生の使用人ですが、宗司様の命令の方が優先度が高いのです。家族のためには、働かなくてはいけません。です。先生がどれほど私の仕事を奪おうとしても、それは無駄というものです。先生の攻撃に屈することありません。

「いいか小娘。俺は。お前を。金で。買ったんだ。このまま何処かへ売り飛ばす気など俺はないのだから、せめて俺の命令ぐらいは聴かんか」

「どうして他の使用人には最低限の仕事をさせるのに、私には何一つとしてやらせてくれようとはさせないのです？ 私には、『好き』で先生のお世話をしているといいますのに」

「……………」

だんまりを決め込む先生。言えないのなら、私からはこれ以上、何も言いません。

私は先生が本当に嫌がっているのなら、絶対にしません。したくありません。

「言うことを聞かないのなら、俺はお前に技術など授けん」

そうきましたか。確かに、小説を学ぶという裏向きの理由があつて使用人をしている私にとって、その命令はかなり痛手ではあるのですが、しかし……、

「小説というものは自ら学ぶものだーっ、と先日おっしゃったのは誰でしたっけ。私はそのお言葉を真に受け、先生の小説の写しをし、ちよつとした癖を学んでいる最中です」

お父様も言っていました。技術というものは教わるものじゃない。盗むものだと。

「技術だけを身につけてどうとなる。物を言うのは経験だ。米が植物であることすら知らないような女学生に、小説など掛けるものか」
ああ言えばこう返す。先生は理屈が大好きな方です。……ですがしかし。

「……あの、そのぐらひは、知ってますよ？」

そういえば、先書粒子の小説でもありましたっけ。主人公の女性が、稲を脱穀することによって、米という食べ物になる……という日本人なら誰でも知ってしかるべきことを知らなく、物笑いの種とされた、という短編が。もしかして、先生も？

「なんだと……？ 俺でさえ二年ほど前までは知らなかったのだぞ……？」

「いやあ、今時であろうが何時であろうが、日本人である限り、子供でも知っていることなのではないでしょうかね」

わざわざ子供に聴いたこともありませんが。当たり前すぎて。
「だったらあの『兎おひしかの山』で始まるあの童謡は兎が美味だ
というのではなく、」

「兎を追いつけた……でしょう？」

「……………」

というよりは、よくその童謡を知っているものと、むしろ感心
してしまいました。調べているのでしょうか。それにしても偏見が
強いですが。

「くそ俺はずっと兎が喰いたかったからそう歌っていたのだと思
っていたのに」

兎は美味しいとも聞きますが、その解釈の仕方だと、かなり印象
が変わってしまうのでは。

しかしまあ、漱石枕流な先生なのに、よく自らの過ちを認めるも
のです。

「……………それだけ教養があるのにわざわざ俺にかしづくこともないだ
ろう。遊び足りない小娘の分際でどうしてそこまで俺の世話を焼き
たがる」

こ、これしきのこととて教養があると言われても、全く嬉しくない
のです……。

「んー、なぜでしょうね。誰かに頼まれたからですかねい」

少しかだけ宗司様の口癖を真似してみました。そちらの方が愛嬌が
あるかと思ひまして。

「……………間違つてもあの男の言うことは聞くな。あいつは碌でもない
男だ。影響を受けるなど以ての外だ」

すると先生は私の答えも待たず、話題が別の方向へ移動してい
きます。どうやらお気に召さなかったようです。それもそうでしょう
か。先生は宗司様のことを、少なくとも口先だけはとことん嫌つて
いますから。私からすれば、素直じゃないだけ、となります。

話を反らすことには成功したようで、私もずるずると、話をそち
らへ移動させていきます。このまま使用人の話を続けていたら、先

生が私の職務にケチをつけるのが見えていたのだ。

「女学生の身として言わせてもらいますと、先生よりも遙かに、宗司様のようなレディーファーストの精神がある男性の方が憧れてしまいますよ。先生も少しは柔軟に考えまさんと、お嫁さんになってくれる女性も逃げてしまいですよ？ 自分の行動を省みてくださいな。私に言われたからどうとういうことでもないでしょうが」

「……………」

思い当たる節が………というか、しかないのでしょうか。先生は苦悶の表情を私へ見せます。

・

「……どう、すればいいんだ？」

「あら」

珍しい。先生が言葉をつつかえさせるなんて。……いえいえそちらではありませんって。私もまさかの先生の取った選択に、かなり動揺しているようです。

ここまで強情な性格ですと、どうも自らの非を認めるのには強い抵抗があるようです。知らないことでも「知っている」、やれないことでも「やれる」などと突っぱねてしまうのです。そんな先生が、ぎこちないながらも小娘と呼んで蔑んでいる私なんかには質問をしてきているのです。私のこの驚きは、量りようがありません。

「そうですね……まず、優しい言葉をかけるところから初めてはどうですか？　そんな扱いをされて嬉しい女性はいません。言うは口八ですから、言うべきだと私は思います。あ、私は先生からなら小娘と呼ばれても構いませんけれど。それ以外の方なら、うふふ」

「口八？」

「あ、無料という意味です」

「どうして口八と無料が結びつく」

「ほら、只^{ただ}って漢字を分解すると『口八』になるでしょう？」

私は空中に、指という名の筆を用いて書きます。

「これだから今時の若者は……言葉を崩壊させるつもりか」

……片棒を担いでいる先生には言われたくありませんが。先書粒子の影響で、大人たちから言葉の乱れを嘆かれているキヌのような例があるので。私がキヌのような言葉遣い（というより、先書粒子作品の登場人物の口調）を真似したら、先生はどう思うのでしょうか。

「そんなことを言いだしましたら、例えば、ご飯をよそう杓文字なんかはどうなってしまうんです。平安時代ではもともと『杓子』と

しか言いませんでした。理想の女房はこういう言葉を使う、となんでもかんでも語尾に『もじ』をつけた結果、杓文字と呼ぶようになり、今や、すっかり市民権を得ているこのご時世」

「俺は現在の話をしている。そんな千年単位の話などはせん。そこまで頭が固ければ俺は武士の喋りをしないといけなくなる。今さらそんなことはできん。……ふん。話を戻すがつまり要約すると幼い頃より培ったこの癖を今更直せるものか」

「そう堅く考えなせずに。宗司様のように、ごく自然体でいいのですわ」

「……………」

「自然体でいいんです」

無言の圧力がきましたのですぐ元に戻します。私は所詮、付け焼刃ですので。

「それが無理なのだと知れ」

難しいです。類は友を呼ぶものなのに、宗司様のように振舞えないのでしょうか。……まあもちろん、私だってキ又とハヤのように振舞えと言われても、土台無理ですが。あれは個性が強すぎます。「では、その口ぶりはどうにもならないとして、もう少しこう、柔らかく相手の名前を呼んでみたらどうでしょう。『宗司！』みたいに尖ったものではなく、『そうし』のように」

「よりにもよってどうしてあいつを引き合いに出す」

「私、先生の知り合いは宗司様しか知りませんもの。……それが無理でしたら、私個人としましては——……『小生』でも使えば、大分印象が変わるのですが」

「ふざけるな」

「あら。嫌われてしまいました。残念です」

きつと先生の、小生という一人称は、とても似合うと思いますのに。

「一人称が駄目なら仕方ありません。宗司様のように、気心を知りすぎた仲でも難しいのですか。——でしたら私が練習台になります

から、好きなようにお呼びなさつて。どうせ小娘な私に、恥ずかしがる必要なんてないでしょう」

「……俺としては『七君』と呼びたいのだが」

「ななきみ？」

「なんでもない」

先生がぼつりと呟いた言葉は聞こえていましたが、それがどういう意味なのかは、私には理解できませんでした。

「もしかして先生、私の名前が分からないとか、そういうことですか？」

「倉持美古都。……覚えていないわけがないだろう」

先書粒子の連載は話しの破綻や矛盾が少ないことで有名ですので、記憶力はかなりあるのでしょう。名前の方は宗司様が『美古都ちゃん』と呼ぶのでもかく、名字は初対面の時に一回だけしか名乗っていません。

「私は先生と、淡々とした主従関係で終わらせたくありません。折角こんな出会いをしたんですもの。もっと思い出に残るような経験をしたいです」

私がそう言いますと、先生はミケンに皺を寄せます。

「……み、みこ、」

なんと律儀なことに、実践しようとするのです。頑張れ、先生。よちよち歩きをする幼児を見守る母の目線で、私は先生を応援します。……我ながら上から見下ろしているなあと感じましたので、認識を改めなければ。私は使用人なのです。

「………………。おじよ、おじよう、お、おじよ、う、さん……」

おや、路線変更。私個人ではなく、そこらで通りすがりの一般人と思い込めるよう、当たり障りのないものに変えたようだ。

肌が白いせいで血の色素がそのまま皮膚ににじみ出ているのではないかと心配になるくらい、それこそ花も恥じらう乙女ですら恥じらってしまう先生は、私の心へ深く染み入って――

「……………」

だ、駄目です。先生は大真面目なのです。冗談でもこんなことは言わないのです。ですからここで感情を露わにしましては。冷静に、冷静に――

「ふふ、ふふふふふ、あ、あは、ははははは」

――なりきることはできませんでした。

「……小娘。覚えておれよ」

「ご、ごめんなさい先生……だって、だって、宗司様のようにさうと、言ってくれるのなら、笑いもしませんが、ふふ、本当に、恥ずかしそうに、ふふふ、言ってますもの。あはは、おかしいです」

今日の午前中の仕事は、なんとか笑いを止めることと……そしてすっかり機嫌を悪くした先生を宥めることで費やされてしまいました。そうしませんと、今月はもう平気ですが、来月あたりから本人も気が付かないような報復をしてきそうです。そんなことをされた日には、倉持美古都は生きていく糧を失ってしまいます。

午後になっても空はどんよりと重く低く、青空を拝めるのは、どうやらまだ先になりそうです。お買い物はよほど雨が酷くない限り毎日行っていますが、やはり雨が降っていますと、食材が濡れてしまったりして大変です。

梅雨の季節は使用人にとっても迷惑な季節です。干すことが出来ませんからお洗濯物が一向に乾きませんし、お掃除も少し手を抜いてしまうと、途端にカビが生えてしまいます。

しかし私自身は、この季節をそれほど嫌っていません。

昔からそうなのですが、私はどうも、人と違う感性を持つて生きているらしいのです。お友達がみんな好きなものが、私にはあまり良いもののように感じられなかったり、あまり面白くないと評判の小説が、たまらなく好きだったり。それはそれで、世の中を楽しく生きようとする心を持てていると自己を分析してみたりします。

「まいど！ 今日も付け足しといたからね！」

「ふふ。どうもいつも、有難う御座います」

顔見知りの八百屋さんの店主は、よくこうしてサービスしてくれますから嬉しいかぎりです。それもこれも、皆さんがやさしいから世界は思っている以上に優しいのです。世間の荒波など、知らなくてもいいものはたくさんあります。

「ふう……」

これで夕食の分は買い揃えました。あとはお屋敷に「帰る」だけ。帰り道は、いつも違う道を通るようにしています。まだまだお屋敷の方角は土地勘がないため、慣れるという意味も含めて、こうして道を変えているのです。

今回は少し寂れた通りに足を向けてみました。

この辺りはまだ近代化の流れに取り残されているかのように、明治どころか江戸から続く、古い町並みが続きます。この町は発展し

ている方だと思っていました。こうして一つ道を違えば、まだ古き時代が残っているのです。モダンもいいものですが、温故知新。古いものだって、とても大切なのです。

塀から紫陽花の花が小さな顔を覗かせています。それに近寄って眺めてみました。雨に濡れても必死に咲く紫陽花は、どんな苦境に陥っても絶望はしてはいけなと、私に勇気を与えてくれるよう錯覚させます。この小さな花の一つ一つが、それぞれの生を謳歌しています。

当てもなく彷徨いながら歩いていましたら、ふと私の目に一軒のお店が映りました。

……いえ、そのお店にいるお客様に目を奪われたといったほうが正しいでしょうか。

看板も掲げられていませんが、開け放されている戸から壺や皿がちよこんと顔を覗かせています。そして傍には小さな値札が。骨董品店なのでしょう。そういう目で見なければ、そもそもこのお店が営業をしているお店だということすら分かりません。事実私も、そのお客様がいらっしゃいましたから、お店だと判断できたのです。

天気の良い日のせいか、はたまた最初からなのか、外見は（失礼を承知ですが）お屋敷と同じくらいに汚く、とても不気味で、異質な空気を周囲に振りまいています。

……心なし、この周囲の空気が黒く思えるのはおそらく気のせいでしょう。例えば晴れの日の昼でもカラスが空を飛んでいそうなのは、私がお屋敷で勝手にイメージを膨らませてしまったから。そのせいなのです。

雨が今にも降りそうな天気だからか、気温の割にはじめじめと蒸し暑い。そんな気候の中、店内に唯一居るお客様は、青い着物を基本としていました。つばの広い帽子を被っているせいか、夏という季節を先取りしている気分を周りに与えます。しかしそれを中途半端に否定するように、着物は乙女の柔肌を守る衣服以上に、びつちりと一分の空きもなく露出がありませんし、帽子はつばが広すぎて、

狭い店内のあちらこちらにぶつかっています。

加えて、ある一つの特徴が、お客様の雰囲気や異質なものにしていました。

お客様は、オペラの仮面をつけているのです。

ただでさえ不気味なお店は、たった一人のお客様のせいで、より一層不気味になっていました。私にとつて、大柄な男性と会話するよりも恐いです。子供の頃なら間違いなく泣いています。理由もなく泣いています。そういった類の怖さです。

.....。

午前の例の出来事により、めつきり機嫌を悪くした先生は、書斎へ入り鍵を掛けたかと思うと、数日後に迫っている締め切りに間に合うよう執筆を再開したはずです。決められた期日を守ってこそプロであるのです。ですから、まさかこんなところで、油を売っているはずがありませんよね。あそこにいるお客様は、なんだか先生にとてもよく似ているだけの、私とは縁もゆかりもない他人なのです。今の私はどこか、普通ではありません。心のうちのどこか一部分が、好奇心旺盛になってしまっています。私は迷わず入店しました。

「うを、客だ。珍し過ぎるぜ。じゃなかった、いらっしやい」

私を接客してくれたのは、くりくり頭で、年齢の割には精悍な顔つきをした少年です。

「こんにちは。初めましてお坊ちゃん」

「……………。おねえさん見ない顔だね。この辺に住んでいる人だつて、この店には滅多に近づこうともしないのに。…………あの人は除いて、だけど」

少年はちらちらと、私以外のお客様を見ながら言いました。ということは、あのお客様は、よくこちらのお店にいらっしやるということでしょうか。

「はい。最近、こちらへ来るようになったばかりです」

「へえ。近所？」

「三丁目です。あの大きな洋館の」

少年は一瞬悩みましたが、どこのことなのかすぐに分かったようです。あの周辺に、あそこほど大きい洋館ありませんから。

「ああ、リヨクレイカン。…………え？ おねえさん、リヨクレイカンに住んでんの？」

「リヨクレイカン？」

私は少年の言葉をそっくりそのまま返しました。聴きなれぬ単語だったからです。

「緑霊館。緑の幽霊の館。この近所では、あそこのことをそう呼んでるよ」

なるほど。イメージにぴたりと当てはまります。館を覆う緑の蔭と、いかにもアレが化けて出そうなおどろおどろしい雰囲気。この名前を聞いて爽やかな印象をもつ人はまずいないでしょう。これほど簡潔にあの館の特長を言い当てるなんて、初めて呼び始めた人はいい感性をしています。私も先人に習って、我がお勤め先をそう呼

ぶことにしましょう。

「てつきり俺、あそこには人が住んでいないのかと思ってたよ。住んでたとしても、いるのは幽霊ぐらいだとばかり」

「そうですね。私も初めてあのお屋敷へ参りました時、本当に人が住めるのか不思議でした。ですが、とある男性がいまして。私はその方に奉公することになったのです」

「大変だね。今時身売りなんて、田舎の方かしらないと思ってたよ」
「それは色々と事情がありました。そこまで悲愴なものではありませんよ。気楽なものです。ご飯を作ってお掃除をするだけですから」
「それどころか大きな役得に預かれるのですから、他人の見るよりずっと幸福です。」

「あ、ご飯と言えば、君はお米が植物から採れることを知っていますか？」

「……米って、あの米？ 白くて長細い、どんな料理でも必要な主食の……」

「そう。そうです」

「当たり前でしょ。っていうか、知らないとか言ったら危険だと思うよその人。外国人？」

「ですよー」

ふふふと笑っていると、ぞくつ……と、背筋に悪寒が走ります。

おそるおそる背後を確認すると、あのお客様が、オペラ仮面をこちらへ向けていました。ひたすらに表情がないので余計に怖いのです。まだ怒った顔を向けられた方が覚悟を決められるというもの。心を収める容器がございません。

「とにかく、こちらへ越してきたばかりなんです」

「そ、そうなんだ」

お客様はまだこちらを睨んでいます。どんな目をしているか確認したくありませんが、こちらを突き刺す視線は間違いなく狩人のもの。私と同じことを少年も感じたようです。これ以上このお話を続けると、帰ったら執筆を続けている先生に何故か恨まれそうですか

ら、ここで終わらせることにしました。

「お店番ですか？」

どうも空気が重いようなので、ここは明るくしませんと。少年へ世間話を向けることとしました。男の子が好きそうな話題なんて話題の種として持ち合わせていなかったので、当たり障りのないところから始めました。

「うん。毎週この曜日には、ここで店番するようにはあちゃんに頼まれてるんだ。本当は剣道の稽古をしたいんだけど、ばあちゃん怖くて」

「まあ。偉いのですね」

とても微笑ましいその理由に、私はつい、笑ってしまいました。

「それほどでもないよ」

「照れなくてもよろしいのに。お婆さんを心配する時風君は、きつと強い剣士になれますよ」

「へへ、そうかな」

真に可愛らしいことに、少年は顔を赤くします。私の仕えているご主人様もよく赤面しますが、肌が白いから目立つだけのあちらと違って、素直な反応をしてくれる少年には、とても好感が持てました。

「ふん。そんな小娘にほだされているようで一流の剣士どころか男にだってなれるものか」

耐えに耐えかねたのか、お客様が、私たちに口をはさんできました。

「少なくとも私の先生のように意地悪な男性よりは、この子の方がよほど大人です」

「……………」

「言っておきますが、私は、あなたに言ったものではありませんよ。私の先生は現在、お屋敷の書斎で小説を執筆なさっているはずですから。締切が間近だと、担当の編集の方が嘆いておられました。友人の期待にはきちんと応えてくれる、熱いお方ですよ」

「……小娘。貴様いつからそんな皮肉を言うようになった」

「お仕えしているご主人様が皮肉大好きな方ですから。きっと、影響を受けてしまったのでしょう。ああ、私は、理想のあの方を裏切るわけにはいきませんのに」

私の責任ではありません。全ては今この場にいない、先生のせいなのです。

「なに？ おねえさん、この人と知り合いなの？」

置いてけぼりになった時風君は、私に助けを請うてきました。

「いいえ。私のご主人様は確かに偏屈者ですが、あのような人ではありません」

「ふうん」

少年はそんなことはどうでもいいようです。

すっかり私に言い負かされてしまったお客様は、ぷいっとそっぽを向いて、壺を眺めていました。その姿の子供っぽさときたら。

師・6

「ひよっひよ。うるさいと思ったら、珍しいよのお。可愛らしいお客が来ているものじゃ」

店の奥から、小さなお婆さんが出てきました。これが時風君のお婆さんなのでしょう。これまた店の雰囲気にあった老婆で、……なかなか、不気味です

「どうやらこの餓鬼の端女のようにじゃが……はて。この餓鬼は、女子に手出しをできるほど甲斐性のある男だったかえ？」

「……餓鬼という年ではない。俺はもう二十も八つばかり年を取った」

お婆さんが指している『餓鬼』とは、誰のことを言っているのでしょうかと思ったのですが、お客様のことでしたか。私よりも年上なので違和感を覚えましたが、お婆さんからしてみれば、私たちの年齢の差なんて、あつてないような些細なものなのでしょう。

——それにしても、たった今、初めて先生の年齢を知りました。先生は見た目が特殊なため、いまいち年齢が分からなかったのです。先生も宗司様も、自ら年齢を明かそうとしません。どうも先生は宗司様より一歳は年下らしいのですが、並べるとむしろ先生の方が老け——いえいえ、年上に見えます。けれど先生の年齢である二十八より上なのだとしたら、宗司様は少なくとも二十九歳。そうだとしでも十分に若く見えます。むう、余計に納得できません。

……いけないいけない。ここにいらっしやるのは先生ではなく、お客様なのです。全く関係のない人を見ながら、先生の陰口を叩くなんて。使用人の風上にも置けません。

「わしからすれば十も二十も三十も変わらんよ。おまえさんはいくつになるうが、餓鬼じゃ」

「……昔から俺を知っているのならともかく、俺がこちらに越してきたのは十五だ。まるで俺のオシメを替えたことがあるかのように

言うな」

十五歳の先生……全く想像ができません。今の私とそれほど変わらない年齢。

「まったく、このような男の端た女になるなど……難儀なものよ」

「いえ、私は先生の使用人となれて、幸福とさえ思っていますよ」

「よいよい、そのような世辞を言わずとも。花の女学生が、こんな男と同じ空気を吸うことなどないぞえ。ワシもお主ぐらいの歳月の頃は、女学校へ行くのに派手な格好をして、男の目線を独り占めしていたものじゃわい」

いつひつひ、と笑うお婆さんは、過去の栄華の残滓となるものは、私の目からしてもあまりなく……当然、お客様は「なにを言っているんだか……」と呆れた目を向けています。

「ほざけ。己が若かりし時節は、まだ女子とて男袴の着用をしていたはずだろう」

「なにを言うか。わしはそんな女に混じり、茶式部をじゃなあ」

「時という絶対的・普遍的な串が、柔らかな団子すら刺せぬほどに曲がっておるぞ」

女学生が男の恰好をする。そんな時代があったのですか。今日、その名残すら見受けられないところを見る限り、どうやら完璧に廃れた文化のようではありますが。

それにしても、ようやく先生が少女小説家である一面を垣間見た気がしました。

「はて、そうだったかのう？ 年を取ると物覚えが悪いものでお」

「都合のいい時だけ年寄りになるな、ババア」

「ばばあ……じゃと？」

俄かに、お婆さんは顔を顰めました。

「うわ、婆ちゃんの琴線に触れちゃった。おねえさんおねえさん、耳塞いどいた方がいいよ」

私の返事も待たず、少年は早々に耳を塞ぎます。厭な予感があったので、私も少年に倣いました。その咄嗟の判断は、どうやら正解み

たいです。

「この！ 戯けが！ れでーを捕まえて！ ば・ば・あ、とは何事じゃ！」

稲妻を落としたような衝撃がお婆さんの口から発せられます。その衝撃波は凄まじく、私の前に置いてある大きな壺が、カタカタツと揺れました。

「今、自分で年を取ると言っただけだろうが……」

ご主人様のつぶやきが空しく響きます。それを聞き届けてあげられたのは、どうやら私だけだったようです。

「そもそもおまえさんという男は――」

あら？ 少年がいつの間にかいなくなっています。きっと店の奥へ退避したのでしょう。

大きな声のお小言は延々と続くようなので、私はしばらく、事件現場からなるべく離れた、入口あたりの商品を見て回ることになりました。……決して先生、もといお客様を見捨てたわけではございません。ただ、私はお婆さんに怒られるようなことは何もしていません。それに、どう宥めればいいのか。繰り返しますが、決してお客様を見捨てたわけではありません。そんなことを考えれば怖いこと、できるはずがないでしょう？

さて。折角の骨董品店。私も少し、耳を塞ぎながら見物することとしますか。

お客様が物色してらしたのは壺や筆笥など、置物や家具の類でしたが、私が見ているのは小物の類です。西洋から輸入されたらしいそれらは、なかなか赴き高く、可愛らしいのです。一部の区画には呪われていそうな人形があったりしますが、まあそれは極力無視しましょう。

そうして一つ一つを手にとって見て、触って、調べて。お金さえあれば、今すぐにでも買いたいと思える、良い物も結構あります。その中で、一際私の目が惹かれたものがありました。

白い木彫りな、龍の模型です。

それは鱗の一つ、爪の一欠けらに至るまで精巧に作られていて、まるで作り手が本物を見たことがあるかのようで、創作物には到底見えないほどの出来栄えです。

振り上げられた腕は今にも襲ってきそうな凶悪さを秘め、金色の髭は夜道を照らすランプのように爛々とした光を放ち、うねる尻尾はこれから天に昇るように躍動感が溢れます。目は紅いガラス球がはめ込まれていて、こちらをぎろりと睨みつけてきます。

これは、先生だ。

何故か私はそう思いました。

・

「ひよっひよ。それが気に入ったのかえ？」

……いつの間にやら、お婆さんが隣に居ました。全く気づけなかったのです。既にお小言は終わっていたようでした。お客様が見当たらないからどうしたのかと探してみると、壺と壺の間で正座をしていました。心なし、いろいろと小さくなっているように思えます。ああ、見たくない。あんな情けないお姿。

「悪戯坊主には、ああするのが一番の薬じゃよ」

「で、でも、先生は私より、」

あら。どうして私は先生と口走ったのでしょうか。言い直します。

「で、でも、お客様は私より、大人ですが……」

「二十を超えていようが三十を超えていようが、男として産まれながら女の一人も養えないのでは甲斐性なしじゃよ」

ある意味では、私を雇っているのだから、養っているともしえなくは……そう考えて、これではまるで、先生に嫁入りをしたみたいではないですか！と感じてしまい、私は一人、勝手に顔を赤らめます。

「……流石にそこまで収入が少ないわけではない」

帽子を目深に被りなおしたお客様は弱気に反論します。

「——えい！」

少々気になったことがあったので、お客様の帽子を取ってみました。少し涙目でした。

「……申し訳ございません！」

お客様は自尊心がとても高いお方のようなので、これ以上不躰で小娘な自分が、見知らぬ他人の心を削らないよう、何事もなかったかのように帽子をかぶせなおしました。

「わしの店で使う金、あれがおまえさんの金というのかえ？」

「その金で生計を立てている婆に文句を言われる筋合いはない」

「金と心は天下の回りものじゃよ」

「斬新な表現だな。今度、小説にでも使わせてもらおうか」

「ひよっひよ。わしも文才のある才女かえ？」

「……皮肉も通じないのか、このババアは」

最後の一言だけ、若輩な私がやっと聞けたほどの、とても小さな声でした。このような小声では、到底お婆さんに声が届くはずありません。いえ、聴かすつもりはないのでしょうか。

「この龍はじゃな、わしの旦那が作った物なんじゃよ。芸術家気取りな奴だったでな、こうして彫っては、よく店に飾っていた。売れないんじゃないかな。ほっほ」

笑っていいのかわかりませんでしたので、微笑むことで誤魔化しておきました。

「確か、旦那が死ぬ前に作製に取り掛かっておったから、もう二十年はここに置かれていることになるかの。それまでの間、誰一人として買い手は付かなかったたので。……そうじゃ、もし良ければもっていきんさい。置かれていても仕方がない。どうせこいつに目を掛けたのは、ここにいる男と嬢ちゃんだけじゃ。どうせ同じ感性を持つ者なら、より若者に貰われた方が、若者に持って行かれた方がワシの旦那も、龍も、双方ともに喜ぶじやろう。ワシも長くはない身。ワシがいなくなったら、こいつの行方は知れぬのでな」

私と、先生が似た者同士。どうしても、嬉しくなってしまう。先生は嫌がるだろうと、視界の淵でお客様を（無関係ですが。もう一度言いますが無関係ですが）、ちらりと伺ったところ……、

私に見られたことに気がついたのか、すぐに表情を元に戻してしまいました。

とても恥ずかしそうに、そして、嬉しそうに、頬が緩んでおりました。

「いえ、でも口ハ……無料というのは悪いです」

「いいからいいから。年寄りの親切は無碍にするものじゃないぞえ」
有無を言わず、私に龍を押し付けてきました。いいなあとは感

じていましたが、特に欲しいと思ったわけでもないですから断りました。しかしぐいぐいと無理やり押し付けてきましたは、私の抵抗もあまり意味をなしません。なるほど、このお客様が苦手意識を持つていても無理はないです。意外なことにも、押しに弱い性格をしていますから。

「……待て。散々我慢してきたが言わせろ。その龍は俺が幾ら言おうが譲ろうとしなかったくせにどうしてその小娘にはそう簡単に渡せる」

「ほう？　ワシは、一万出せば考えるとは言ったがの。一万出さなければ渡さない、とは言つてないぞえ」

まさか一万銭……などということもないでしょう。一万円。それだけあれば、借金をどれだけ返せるのでしょうかなどと、お父様の抱えた借金の額も知らないのに考えてみます。

「……く」

苦虫を噛み切るぐらいの勢いで、お客様は齒ぎしりを始めます。

それが精いっぱい抵抗なのでしょう。

「そうじゃったそうじゃった。確か、これを仕舞うための箱があったんじゃった。ちよつと待っておれ。今すぐ包んであげるからの」

お婆さんは正式に私へ明け渡すため、その準備に店の奥へ消えていきました。

「……小娘」

「は、はい……？」

「覚えていろよ」

何を？　とまでは聞けませんでしたが。それぐらいの迫力が滲み出ていたのです。

「……………」

「……………」

私たちは長年の付き合いがあるかのように、連れ添って歩きます。けれど間にばかりと発生している空間には、今にも雨の降りそうなこの天気よりもどんよりとした空気が漂っています。

「あの、お客様」

「……………」

私が話しかけてもなしの礫。先ほどからずっとこの調子です。

「これ、いりますか？」

お客様が狙っていたのですし、ここは先陣を切った方に差し上げるのが礼儀というものでしょうか。しかしあまり強く申しまして、お客様の自尊心を侵害する結果になりかねません。この微妙な加減が、半熟のオムレツを作るかの如く大変難しいのです。どうして私は見知らぬお人の機嫌を買わねばならないのでしょうか。

「いらん。あのババアが勝手に渡したものだ。好きに持っておけ」

そうは言うものの、私の胸に抱かれた桐の箱をちらちらと見ています。本当は欲しくて欲しくてたまらないでしょうに。

「……………」

「……………」

そしてまた沈黙。

この状況を少しでも打破しようと会話を試みようとしましたが、そもそもお客様がどんな話題なら乗ってくれるのか、それすら私は知りません。ああこんなことなら、もっと宗司様から普段どんな世間話をしているのか聞けばよかった。

「あのお婆さんと、どんな知り合いなのですか？」

どうしようもないので、あのお婆さんのことについて尋ねることにしました。

「俺がこつちに越してきた頃に宗司の野郎に連れてこられた所があるの店だ。まったく俺は確かに骨董品店に連れて行けと言ったがなんによりによってあの店だったんだ……」

後半の台詞は私に宛てられたものではなく、どこかにいる、私の先生と同じ名前を持った友人への愚痴のようです。その後もしばらく、その方への恨みを口から吐いています。聴かなかったことにしておきました。そうしないと報告義務が出てしまうので、これは先生のためです。

「そんなことよりお前こそどうしてこんなところにいるのだ。商店街はあちらだろう」

「こちらの方へ少しお散歩がてらに来てみたんです。そうしたら、お面をした不思議な男性が壺を見ているものですから。後ろどこから前髪が引かれたような心持がして」

「ふん」

お面のせいで顔は分かりませんが、見えたとしても、やはり無表情なんでしょうね。

「物好きなものだ。まだ小娘のくせに骨董に少しでも興味を持つな。小娘は少女小説でも読んでいればいい」

「私は面白いものならなんでも好きですよ。それに少女小説は、私にとっては数ある楽しみの一つでしかありませんからね」

「参考までに訊くが他の楽しみとは例えばなんだ」

おかしなことを訊くものです。まるで、他人の経験を質問してまわる、先生みたいじゃないですか。先生は資料を集めるという名目で、若い娘の行動や心理を、よく私に質問をしたりします。それが先書粒子の先品に、どれだけ影響を与えるのか見物です。

「例えば骨董。例えば文学。例えばお花。例えば——我自権先様」

「……………。本当、物好きなものだ」

さきほどと同じ言葉を、少し強調して、お客様は言いました。

我自権先が誰であるのか、そちらは訊いてこないのですか。まあ、そうでしょうね。

「あら、雨かしら」

ついに雲が決壊してしまいましたか。緑霊館まであと十五分はかかるでしょうに。

「雨宿り、していきませんか？」

「ふん。そんなことをしている暇があったら執筆する。濡れなくなかったら、好きなだけ道草してくればよい」

「あ、お待ちになってください」

私を無視してさっさかと歩いて行ってしまう。しかたありません、少々濡れることは覚悟で、私は——先生の後ろを、三歩後ろに下がってついていくこととします。

・

「美古都。手紙よ」

やはり、今日来ました！

猫がネズミを捕まえるように、私は軽い身のこなしでお母様の持っている手紙を、それこそ奪い取るようにしてお母様から受け取りました。

「こら。はしたないですよ」

「ごめんなさいお母様、今だけは……今だけでも、悪い娘でいさせてください！」

もう体中の血が疼いてしまつて、止めることなどできないのです。
「もう、あの子つたら」

お母様の悪態は既に私の耳に届いてはいません。私室へ入った私は戸をぴしゃんと閉じ、机に封筒をゆつくりと置いて、ペーパーナイフで丁寧に開封します。その間、私の心臓は鼓動を遅くすることを諦めていました。五臓六腑を引っかき回さんと暴れ回っています。
毎月十五日。この日になると決まつて、我自権先様からの封筒が届くのです。いつから明確に決まっていたのでしょうか。すでに私も覚えてはいません。

キ又とハヤなどには、どうして私がそこまで我自権先様を敬愛しているのか言葉にしたことはありませんのは、それだけ私にとって思い入れのある方だからです。口から洩れると、気持ちまでも零れてしまう気がするのです。

私が尋常小学校に上がる前から、そして、生まれて初めて小説の著者というものを覚えた記念すべき作家が我自権先様です。まだまともに漢字すら読めませんでしたのに、街の本屋で見かけた、作者の名前の部分が金色で彩られている小説が、どうしてかとても華やかに見えたのです。読めもしない小説を買った私は両親に読み聞かせて貰いながら、一生懸命に内容を覚えしました。その物語は子供心

でさえ、とても感動した記憶があります。今でもその短編は諳んじることが出来ます。我自権先様の小説は私の人生においての教科書なのです。

感動した当時の私は、習ったばかりのカタカナを使い、我自権先様へ手紙をしたためます。しかし子供心ながら「私のような子供が手紙を書いたところで迷惑かもしれない」と思った私は匿名で、住所の記されていた出版社へ送ることにしました。数日後、なんと我自権先様から返信があったではありませんか！ 名前こそ匿名でしたが、そこはどこか抜けた私、住所はしっかりと書いていたのです。どうやらそこから突き止められたようで。

手紙の内容は「アリガトウゴザイマス。コレマデワタシはホメラレタコトガアリマセン。ホメテクレタノハアナタガハジメテデス」と言ったものでした。なんと、まだカタカナしか書けない私に合わせ、ちゃんと読めるように簡単な言葉を使ってきたのです。私はもう嬉しくてたまりませんでした。遠い存在である、小説の著者と、真っ向から対面したのも同じだったのです。この瞬間から、私は我自権先様の全てに惹かれたのです。

我自権先様の小説は時に、雑誌に掲載されることもあります。そんな時は、出版社へ感想の手紙を出します。すると数日も経たないうちに返事が返ってくるのです。数えてみると、人生の半分に近い期間、我自権先様と文通をしていることになります。

我自権先様は、いつでも懇切丁寧に私と接してくれます。お稽古が大変と書けば励ましてくれまし、友達とのことで悩めば一生懸命に解決策を考えてくれます。その心遣いに、私はとても癒されてきました。

私が漢字を覚えれば、その都度我自権先様も漢字の割合を増やしていきます。現在ではもう遠慮などなさらず、ごく普通に、大人と同じような文面を差しだしてくるのです。それがどうにも、大人の扱いを受けているみたいで、私は嬉しくてたまらないのです。

さて、そんな恋焦がれている方の、月に一度だけの逢瀬。ハミングをしながら、封筒の封を丁寧に破いていきます。

手紙は季節の挨拶もほどほどに、近況報告をしてきました。身の周りの出来事。ふと思いついたこと。嬉しいこと、悲しいこと。笑ったこと、怒ったこと。

それらは決して堅苦しいものではありませんでした。しかし大人が子供をただ見下ろすだけでなく、あくまでも同じ立場になってくれるという、優しさも含まれているのです。この優しさの太陽が私の闇を照らしますから、私はいつだって笑うことができるのです。

【——そうして小生は桜が散り毛虫が降る季節になるかと落ち込んでいくのです。】

一人の大人の男性が内に秘めた想いを、子供の私に吐露してくれる月に一度の手紙も、いよいよ終盤へ近づいてまいりました。この寂寥感。楽しい出来事も、いつかは終わりが必ずやってきてしまうという世の中の真理を、私は毎月味わうのです。

【近頃頼に文章が上手くなってきましたね。小生は追い抜かれないかと不安になります。】

追伸として、そんなことが書かれていました。

そんなことはありません。我自権先様の流麗な文章と比べたら、私のような娘なんて。望遠鏡で星空を眺める観察者でしかないのです。文章を読みながら、そう心の中で答えます。

【きちんと繋げているか。先を促せる内容となっているか。普段の連載では決して意識しないこれらの事象は小生の力不足を改めて実感させるのです。】

封筒には一枚、原稿用紙が同封されていました。

これこそ、私が我自権先様と繋がっていると感ずることが出来る最大の絆。

返歌ならぬ、返小説。

決まりは一つ。話が破綻しないよう、どんどん先へ先へと、原稿用紙一枚分の物語を展開させる。これだけです。

私の手元には、百枚近くもの我自権先様からの返小説があります。おそらく我自権先様も同じだけの枚数、私の返小説が溜まっているのではないでしょうか。もしも、たかが私めのものを大切に保存しておいてくれていたら……そう考えただけで、私の頭には一面のお花畑が広がってしまします。

嗚呼、どうして、手紙には想いそのものを届けさせることができないのでしょうか。伝えることができたなら、これほど簡単なことありませんのに。けれど私は所詮、人間なのです。人間であるうちは、魂を肉体から乖離させることはできません。

となれば、我自権先様へ想いを伝えるためにすることは三つ。

我自権先様への手紙を書くこと。そして、私が手紙を届ける半月以内に原稿用紙一枚の返小説を完成させること。そして、私が作品を完成させること。

私は我自権先様に憧れる故に、小説家になろうとしているのです。早速今日から、取り掛かることにしましょう。鉄は熱いうちに打つに限ります。

——そうして今日もまた、寝不足な一日を作ってしまうのです。

・
・
・

お昼休み、晴れた日には屋上で食べよう。これが私たちの取り決めです。でありますから、四時間目の終了を告げるベルがその尖った音色を校内に響く。学生が安息を手に入れる。それと同時に私たちは移動を開始するのです。

「お古都。最近、やけに忙しそうじゃないか。何かあったのか？」

お弁当の入った風呂敷を気にしながらも、ハヤは私の顔を伺ってそう言ってきました。覗き込むその動作によって、ハヤの匂い袋から、麝香のクラっとくる刺激の強い香りが漂ってきます。顔と性格に似合わず、大人っぽい香りを選ぶものです。しかしそんなハヤですが、身体を激しく動かすためか、いつもお腹を空かせているのです。特にお昼休みが近づきますと機嫌が悪くなるので一目瞭然。もともと、他の生徒からしてみれば人造人間ロボットが暴走寸前、より一層近づこうとしなくなるので、こんな可愛い一面を知らないわけですが。

「いえ、その、別に」

「なんですの？ まさか、また我自権先とやらにうつつを抜かし、寝不足気味だなんて言わないでしょうね？ あまつさえ、それで勉強に身が入らないなどと言った日には――」

「いや、だから」

「睡眠不足は肌の天敵だぞ。お古都は綺麗な肌をしているのだから勿体ないではないか」

「あ、や、ちよつと、ハヤ」

ハヤが私の頬を擦ってきました。私の肌に触れるハヤの手は、やはりお世辞にも年頃の女の子らしいとは言えず、少しだけゴツゴツしています。剣を握っている代償でしょうか。ですが、それでこそ日下部隼というもの。キヌのように白魚の肌では、日下部隼感じがまるでしません。

「せめて、人目のつかないところで……」

「屋上ならよいのか？」

「そういう意味に取らないで！」

「あなたたち、少しは黙らないと……手をこまねかれますわよ？」

ここは廊下。クラスメイトどころか、教師の目に入る可能性だつてあります。度を超えて騒ぎますと、職員室へ連行され、説教が待っているのです。

「わたくしとしましては、美古都さんの肌よりも、脚が羨ましいものですわ。どうしてもこんなにするとしていられるでしょう。美古都さんもスカートをお履きになってみては？ きっと、わたくしよりも合うでしょうよ」

「皮肉が過ぎるぞ。いくら自分が短足だからって」

「な……！ 言っておきますけれど、あなたたちが無駄に長いだけですわ！」

「どうもありがとう。いやあ、お絹から褒められるなんて。とっても齒痒いな」

「誰が褒めていますか！」

「その、キヌ。少し静かにしないと……」

どうもキヌは脚の長さを強く気にしているようで。確かにセーラー服を着ていると、脚は気になるものですが……。

「こうなったら、誰よりも早く、クラスでも話題のアレを発見して……！」

私もハヤも、キヌが指示語でしか表していないものがなんなのか、すぐさま理解しました。

キヌが言っているのはクラスでも話題に上がることが多い、脚が細くなる薬のことです。

スカートというものは、当然ながら脚を露出させます。これで欧米人のように、すらつとしているのならとても似合うのですが、私たちは日本人。脚は短いのです。この体型だと、スカートは似合いません。ですから、女学生にとって脚の細さというものは、何より

も美の象徴となるのです。それを実現してくれる、夢のようなお薬。
「古今東西、始皇帝や楊貴妃のように不老不死や美人になる薬を求めた人間は数知れなくとも、それに成功した例というのは訊いたことがないがな」

……まあ当然、そんな薬などあるはずがないのですが。いや、出回ってはいますが、どれもこれも効果の程は首を傾げるばかり。それでも私たちがそういう薬を欲しがるのは、やはり、人とは手に入らない物でも渴望してしまう生物だからでしょうか。

「……ちよつと美古都さん。とても癪に障ることを考えているような気がしたのですが」

「ああ。全く、お古都という奴は」

「え、え？ 何が、なんで？」

私はただ、ぼうつと二人を眺めていただけなのに。

「自分も薬が欲しいなーって顔をしていたぞ」

「美古都さんにはそんなもの。いらないではないですよ」

「私、あまり自分に自信がないから……」

どうも私は女子特有な、全身の丸さに富んでしまっているのだ……。洋服ならそれでもいいのですが、リーベの給仕服ぐらいしか私は洋服を着ません。和服が年々似合わなくなってしまうのは、正直いただけないのです。

「何を生意気なことを。美古都さんは謙遜がすぎるのですわ。もつと自分に自信をお持ちになってちょうだいくらいです。必要な部分は揃っているといえますのに。これ以上細くなれたら困りますわ。どう足掻いても美古都さんに勝てなくなってしまうではないですか」

どうしてか分かりませんが、キヌはいつもこうして、私の容姿を挙げては、否定の言葉を重ねるのです。譲与できるものなら、喜んで差し上げたいくらいなのに。私は自分の容姿が好きではありません。

「ふふ。敗北宣言か。実に男らしい。わたしみたいだな」

「……わたくし、あなたと似ているという旨を誰が言おうとも、虫酸が走るのですよ？」

「それはよかった。わたしも自分で言っておいてなんだったのだが、お前と共通点があるというだけで臓物が脚まで落ちるからな。今後は容易にわたしの真似をするなよ」

「誰が誰の真似ですか！」

「さあてな。そんな猿真似をする知り合いなんていないもんでな」

ああ、また始まってしまいました。どうしてこんなに罵り合いをする二人が、学友をやれているのでしょうか。親しき仲にも礼儀ありとは言いますが、この二人はさしずめ「親しき仲だから喧嘩あり」といった風情。……ふと考えましたら、それってただの「喧嘩するほど仲がいい」ですね。でも私が考えたものの方が、より二人の特徴を捉えていると思います。

ですが、ただ陰険なだけでなく、こうして口で攻撃した後は、私たちは決まって、

「ふ、うふふふ」「あはははは」

こうして笑いあい、お互いの健闘を祝います。私も釣られて笑ってしまいました。

もう私たちは、過去の陰険さなど、微塵も持ち合わせていないのです。

「私たちはお似合いの『トリオ』でいいじゃないかな、ふふふ」

「そうだな。どうせ、わたしが口を開けるのはお前らぐらいだ。だから、お前らがわたしをどうこう言おうが、全く気にしないさ」

「当たり前ですわ。あなたたちなら、どれだけ雑言を吐いてもかまいませんわ。お返しに、わたくしも同じだけのものを被せるだけですからね」

結局、こうして明るい部分も暗い部分も見せるからこそ、私たちは掛け替えのない友人となっているのです。誰が欠けても、成立なんてしないのです。

「ふむ。それにしても、わたしとしてはお古都にもう少し成長して

ほしいものだな。そう、着物が似合わぬほどに、だ」

ハヤが私にしな垂れかかってきました。それはまさに、芸妓が馴染みの客人に愛想を振りまくかのように。……私たちは、間違いなく、女同士なのに、です。

「ハヤ、その、困るよ」

「よいではないか、よいではないか。女は女らしい身体になるべきだぞ。わたしはもう諦めてるしな……。どうも身体が筋張っていいかん」

「そんな。ハヤだってとても柔らかいのに」

「すみません美古都さん。どうもあなたがその気になっているようにしか感じ取れなくてよ」

ハヤは武道を嗜んでいるせいか、全身のどこを切り取ってもすらっとした体型。女性でありながら、獣のように締まった肉体。女性らしさは感じませんが、それとは別種の、芸術のようなものを、私はハヤに魅力を覚えてしまった……瞬時に、この感情を打ち消します。そうしないと身に危険が及びますので。私は隠しごとを、この二人の前でだけは、まるでできないのです。表情だけで読まれる始末。

「お前らはいいな。こんなに女性をしている。少しぐらい味見させてくれないか？」

「わたくしの目の前でエスの気を起こさないでくれませんか隼さん？ あなたは女性なのですから、男性の肉体を触っていればいいではないですか。あなたの道場の門下生なら、喜んでその身を差しだしてあげるでしょうよ」

そうなのです。ハヤは少しどころでなく、「エス」の気があるのです。隙あらば私たちの身体を触ろうとしてきます。教室では、口ポットと呼ばれるだけあってその評判にそぐわない行動はしているのですが、情け容赦なく本心を曝け出せる私たちの前ではご覧の通り。

「男なんてどこがいいんだ。むさくるしいし、汗で臭いし、飯は莫

迦の一つ覚えのように喰いまくるし……どこにも上品さが無い。見た目だけならお絹が、私はよほど好みだ」

「おや、対象が変わりました。これまで私だったのに、どこが契機だったのかキヌへ。……冗談にしてはやけに感情を込めるハヤに何故か私までゾクリとさせられました。どちらかというと、百物語を聞いたている時の感覚です。もちろん、直接思いの丈をぶつけられたキヌは珍しいことに、少し涙目になりながら、私に救援を求めました。」

「こ、こんなのは断じて、エスではありませんわ！ エスとはもつと、プラトニツクなものなのです！ 乙女同士の、儚い愛情劇なのです！」

「ごめんなさい、ハヤに本気になられたら、私では太刀打ちできないから」

「ですので、私は容赦なく切り捨てることにしました。」

「……この、美古都さんの裏切り者お！」

「ふっふっ。いいなあお絹の口紅をしたように赤い唇。思わず接吻をしたくなってしまうぞ」

「いやあ！ 洒落にすらなりませんわ！ 美古都さん、わたくしの身代わりとなつて！」

「いやですよそんなの！」

「キヤーキヤー」と言いながら、私たちは逃げ回ります。ああ、屋上までの道のりの、なんて遠いことでしょう。

友・2

もうかなり暖かくなってきたので、屋上には私たち以外にも、ちらほら生徒の姿が見受けられました。皆、楽しくお弁当を食べながら、この季節特有の陽気を楽しんでいます。

「ははは。お前ら、うちの目下部道場にくるつもりはないか？ 今ならこのわたしが直々に指導してやるぞ。共に『強い女性』を目指そうではないか」

「ふう、ふう……いやで、す、わ。あそ、この道、場は、息をするだ、けでも妊、娠、してしまい、そう、で、すもの」

「……ちよつと、キヌ、ふう、ふう……その、はしたないよ」
そんな中なのに、どうしてこう見苦しい姿を晒さなければいけないのでしょうか。

私は少し乱れた呼吸を整えながら、同級生を窘めます。キヌも同じく、息がゼーゼーになっています。苦しすぎて、時折咳き込んでいたりもします。

「言っておくがな。同年代だと、男でもわたしの足から逃れることはできないんだぞ。それをまあ、お前らはよくも簡単に逃避し続けるものだ」

全く平然としているハヤに最早、驚くだけの気力と指摘する体力すらありませんのはむしろ残念です。元気であれば、是非その一点について追及したい。

「せいぜい追いついてくれるのは、妹だけだ」

「っ……、っ……、それあ……っ！ あなたたい、姉妹が、……異常な、だけで……」

口を何度も大きく開き、なんとかして声を出そうとするキヌは、見てて痛々しいところがありました。気持ちだけは共感しておきますよ、キヌ。

「それはまあ、協力しないと撒くことなど無理だったわけだけど……」

…」

私は長距離走なら（まだ）得意で、キ又は短距離走なら（比較的）得意。そしてハやは、私たちの頂点を、足し算ではなく掛け算したような運動神経をしています。こんなハヤに追いかけてしまつたら。私たちが逃げ切るには、上手くハヤの気を引いたり、攪乱しながら逃げないといけないのです。幸いハやは、目の前の相手しか追いかけてきません。

「これで二人とも、日頃から身体を動かしているわけではないからな。嫌みな奴らだ」

ハやは地面にハンケチを敷き、その上にどっかりと、お殿さまのように座りました。私とキ又も、ハンケチを敷くところまではハヤに倣います。私は袴が汚れないように、キ又はスカートを巻き込まないように、それぞれ注意しながら座ります。

「ふう……身体を動かすとより腹が減るな。早く弁当を広げようではないか。お絹」

「そんな顎一つでいそいそと隼さんの食事の支度をしましたら、まるでわたくしが隼さんの妻のようではありませんか。そのぐらい、自分でして下さいな」

かなりの時間取り乱していたキ又ですが、少しでも我を取り戻せることができれば、こうしてすぐ我が組の級長・中屋敷絹に復帰します。矜持が成せる技なのでしょう。

「お絹のような妻か。さぞかしそのハンケチのように、大きな尻に敷かれるのであるうな」

「な……！ 撤回してくださらない！？」

「それだけふくよかだと、さぞや触りがいがあるのだらうな」

「……やはり撤回なさらなくて結構」

傍で聞いているだけですのに、思わず私はハヤに正面を向け、なるべくお尻をハヤから遠ざけようと試みていました。

「ハヤとキ又が夫婦……うん？ 意外にも絵になるような……」

武骨な主人と、文句を言いながらも甲斐甲斐しく世話をする婦人。

そんな構図が私の頭の中に浮かびました。今夜あたり、そんな短編も書いてみましょうか。

「……美古都さん。わたくし、先ほどの隼さんのような洒落にできない冗談は嫌いでしてよ」

少女小説は好きですが、だからといって自分自身がエスの気がある単純に決めつけることはできません。

「ということはだな、お絹が妻なら、残ったお古都は……」

ハヤはそう言う、キヌと顔を見合わせました。そして四つの目が私に向けられます。

「……………」

「……な、……に？」

二人とも何かを悟ったような顔で首を上下にくくくくと体操をさせます。

「……娘、ですわね」「娘だな」

「あはははは」「おほほほほ」

「私の知らないところで話を進めないで」

少しだけ涙が出てしまいます。しかも娘などと。子供っぽいことは自覚していますが、どうやら要因は他にもあるようですね……。

特に近頃は、とある人物から「小娘」と呼ばれることが多いせいで、ますます私の早く大人になりたい願望は高まるばかり。ハヤとキヌを鼻で笑って受け流せるぐらいになりたいものです。

風呂敷を広げますと、各人の家の特徴がよく現れたお弁当をそれぞれ広げます。私は洋食屋の娘ということで、サンドイッチ。レタスやトマトなど、新鮮な野菜を使っています。毎朝の仕込みで、お兄さまが物のついでに作ってくれるのです。キヌは煮物。お抱えの料理人がしっかりと味を染み込ませた、とても深みのある一品。ハヤは質素に、梅干しと漬物。そして、卵焼き。というそれは、折角通っている女学校で、質素で笑われないようにと、門下生さんの一人が、毎朝飼っている鶏が産む卵を差し出しているという代物ものです。

「しかしお古都。どうして寝不足なのか、わたしたちはまだ訊いてないぞ？」

「うわあ」

一難を去らせたと思ったら、今度は藪をつついて大蛇を呼び込んでしまいましたか。

「最近の美古都さんの疲れようは、一晩か二晩を徹夜したぐらいではあり得ませんわね。わたくしたちの知らぬところで、なにかを抱え込んでいるのではなくて？」

「だからそれは、我自権先様への手紙の文面が、」

「いつも授業そっちのけで内職しているではないか。なにを今更夜も眠れないほど悩む」

「そうですね。思い返してみると……かれこれ一か月ほど前から続いていますわね？」

「……………」

そうでした。私はいつも我自権先様のことだけを考えているせいで、最早言い訳には使えないのでした。狼少年、ってこれに近い逸話でしたっけ。

我自権先様との手紙は、数日単位で遣り取りをしております。内容は基本的に私が近況報告をし、我自権先様が「貴女のその感性は好ましい」「そこはそうした方がよかったのでは」といった、賛否のはっきりとした意見で、私に新しい目を運んでくれるのです。我自権先様と文通していなければ、ハヤとキヌとも仲良くなれなかったほど、私は我自権先様に強く、その人生観からして影響を受けているのです。

「切り札を出そうか？ 先日うちの男どもが、公園のベンチでスーツを着た男と一緒に、ベンチでシトロンかなにかを飲んでいたお古都を目撃したそうだ」

「……………」

「よりもよって！」

「ちょ、隼さん！ どうしてそんな大事なことを今まで黙っていた

のです!？」

「いやあ、わたしも生の眼で確認したわけではないしな。信頼の
けない武器など使いたくない。……ああ、それと、五つくらい離れ
た町で目撃されたとの情報もあった。休日ではなく、放課後に。乙
女な表情をしていたとのことだ」

「まあ！ 真つ黒ではないですか！」

駄目です。この二人の息が合った追求には、私一人が太刀打ちで
きる代物ではありません。

しかし言ったが最後、どこまでも深く噛み付いてきてしまうこと
でしょう。

ここは多少の傷を厭わず、別の案件を白状することとします。勿
体ぶった言い方をすることで、この二人は余計に喰いついてくれる
ことは身に染みています。……まあそもそも、こちらはこちらで、
もしクラスに話題が広がって、しかも教師の耳に入ってしまったら
……私はどれだけ叱られるか、わかったものではありません。事実
はどうあれ、客観的には、未婚の女性が一人の男性が住んでいるだ
けの屋敷へ出向いているのです。もし過ちが起きたら……。そう危
惧する大人もいるはずです。

「その……言うだけならいいのですが……深く探つてこないことを
約束してくれるなら」

「するわけないではありませんの。わたくしをそんな口の軽い女だ
と思つて？」

「男つぽいと日頃から言われているわたしだ、そんな女つぽいこと
をするはずがなかるう」

そう言いきった二人は、もはや「晴れ晴れとした」と表現したく
なるほどのきりつとした目つきで、私の心を明るくさせました。

これなら、告白しても大丈夫。

「私、とある男性に、買われたんです」

「……………」

「あれ？」

どうしてか二人とも、氷のように固まってしまいました。

「おい待てお古都それはどういうことだことと次第によつてはわたしの両親に掛け合つてお前を養女にすることも吝かではないぞ」「大丈夫なんですかそんな女性を金の力でどうにかできると思つているような人に大切な美古都さんを渡すなんて許容できませんわ嗚呼美古都さんが汚れてしまうそうなる前にわたくしが美古都さんを守らなければ」

一呼吸すら置かず、しかも同時に喋つてゐるせいで、一体なにを言いたいのか分からない私は、言葉の奔流を耐える他ありませんでした。聖徳太子にはなれません。

「えつと……私が小説家を目指していることは知らないよね？ それから説明しないと――」

「わたくしたちは知つてますわよ」

「え」

隠しきつてたつもりですのに。……こんなにも、この二人の前では隠せないのですか。

「実さんに、そういうことを教えられましたので。『美古都は小説家を目指してるみたいだけど、秘密にしてもらいたいみたいだから、黙つてて。露見したら、美古都は怖いから』と」

「あら……お兄さまつたら……駄目じゃないですか……」

「お古都が怖い……」

料理以外は少々抜けているところは重々承知でしたが、これほどとは。これはまた、灸を据えないといけないようですね。

「それがどうした。……はっ！ まさか俺の所へ来れば小説家にしやるぞと騙されてそれで純真なお古都はその誘いにのつてしまつて気がついたら女中の身へと」「違います」

どうしてこうも想像力が逞しいのでしょうか。こんなところもある意味ではハヤの女性らしい一面なのでしょうが。

「私は、買われたという名目で、……先生の元で勉強をしているの。先生は日頃からお屋敷に籠もってらっしゃるから、部屋の管理ができない。私が使用人のようなことをすることで、その見返りとして小説の技術を貰ってんだ」

続けて、私が週に何度かお屋敷に通うこと、その方は使用人に手を出すような方ではないこと、なども説明しました。私は極力誤解を招かないよう、注意しました。あるはずもない言質を感じ取って解釈されてしまえば、もう打つ手はないのですが。

「……わたくしたちは、学校があるのですわよ。なにもこの年から、直接的に職業へ就くための訓練をしなくてもいいではありませんの」自由気ままな行動は、もうほとんど残されていないと感じているキ又は、若いうちは遊ぶべき、と考えているようなのです。作家を目指している私には否定的でした。

「お言葉だがな、夢を目指すのなら活動の開始は早くて悪いことではないのだぞ。剣というものは一日振らなければ三日は取り戻せないものだ。日頃から丹念をして悪いことはない」

一方でハヤは、私の行動に肯定的でした。

「……………」

キ又はハヤの言っていることも、それまた正しいと思ったようで、口を噤んで、私の次の言葉を待ちます。ハヤもキ又はの言い分は理解しているので、それ以上のことは言いません。

「我自権先様に驚かれたいのなもの。私だってもう子供ではない、貴方の小説に刺激を受け、私もこんな難しいことを分かるようになりましたと、お教えしたい」

あるいは、これこそ子供の思考なのかもしれません。それでも私は、早く我自権先様の考えをより深く、知りたいのです。

「お古都とはそれほど長くない付き合いとはいえ、わたしは上辺だけでも、倉持美古都という女を知っているつもりだ。だが、どうしてそこまで我自権先とやらに入れ込むのかは分からないな。大体、我自権先のために他の小説家の力を借りるというのでは、それは浮

気のようなものではないのか？ 喜ぶのだろうか、我自権先は」

「それは」

「片恋をするのは勝手だが、それなら操は立てんとな。その我自権先だって、もしお古都がどこぞの小説家に技術を教わっていると知ったら、嫉妬の一つぐらいはすると思うぞ」

そんなこと、考えたこともありませんでした。

「……よくもまあ、隼さんはそういうことを恥ずかしげもなく言えますわね。男女の仲に口を出すなんて、そんな井戸の周りに群れる主婦のようなことを」

「これでも年頃の乙女だからな」

そういうハヤは胡座を書いたまま、おかずを箸で口元へ運ぶ際、左手を下に添えます。男性なら、まずしない仕草。男らしさと女らしさが同居したこの佇まい。

「武道に恋に勉学に大忙し。……こう言えば、わたしとて、少しは女の子らしく見えるかな」

「……………」

私とキ又は、お互いに顔を見合せます。

「お前らと違って、わたしみたいな女、喜んで貰ってくれるような殿方なんていないだろうから……。せめて他人があたふたしているのを見て楽しむしかないわけだ。夢想をするぐらいは認めてくれるよな？」

秋のような哀愁を漂わせるハヤ。このような雰囲気、恋をしている最中の女学生とて、容易には出すことはできません。……か、可愛い。なんとというか、庇護欲を刺激するというか。これで似非エス気さえなければ。

「その、あの、……願ってれば、いつかは叶うと思いますよ？」

「そうですね。許嫁がいるワタクシと違って、隼さんは自由恋愛をしてもいいのですから」

「……でも、道場の跡取りを貰わないといけないし……」

日下部道場は、門下生もかなりの数を抱え込んでいるようです。

しかし、師範であるハヤの父親は、残念ながら子宝に恵まれず。やっと産まれた子供も女が二人。こうなったら、外から貰ってくるしかないのです。

「妹さんがもらってくれるのではなくて？」

「まあ確かにあいつなら、自分に勝てるような男しか結婚相手と認めないだろうが……」

日下部道場の美人姉妹。『そういう界限』では有名だとかなか。か。

ハヤは飛びぬけて美人……というわけでもありませんが、男性しか周りにいないような環境ならば、まず間違いなく女神になれる容姿を持っています。そして、妹さんも。たしか妹さんは尋常小学校に通っている、十歳だったでしょうか。ハヤを幼くして目を大きくしただけの、とても似ている姉妹。当然、将来の容貌は今から希望を持たれています。

「……………。そうですね。隼さんの話をしていたらふと思いつきました。そろそろ放課後に、アレ、どうです？ 最近、特に退屈で」話を切り替え、キヌはそう提案してきました。

「おお、そうだな。わたしはいいぞ」

「私もいいです」

これまで話していたこともどこへやら。三人が三人とも、顔は「笑い」になりました。私たちは、その場その場だけで生きているのです。

そうして午後は、来る放課後へ楽しみにしつつ、私は密かに内職をするのです。

友・4

私たちとて女学生。遊びたい盛り。放課後に余った大量の時間、無為に過ごすことはないでしょう。街に出て、存分に遊びまわる。そういったことを、月に一度はしています。

「ただいま帰ったぞ！」

がらつと表の門戸を開けたハヤは、大人の男性にも負けないくらい、お腹の奥からとても大きな声を張り上げました。

「お邪魔しますわ」「お邪魔します」

私たちもハヤの後に続きます。

「こんにちわ！ 姐さんたち！」

するとハヤに負けないくらい、可憐で、しかし大きな声が返ってきます。

「うるさい。声は張り上げればいいというわけではない。心が籠っていなければ無用の長物だ」

「うるさいぞ姉上は！ 帰ってきて早々、なんだそのお小言は！」

「だからうるさい！！」

徐々に声が大きくなる二人。流石は鍛え上げられた者同士でしょうか。その筋肉は、喉まで含まれているようです。

「ふう、あいつと話していると疲れる。おい、お絹、お古都。早くわたしの部屋へ行くぞ」

ハヤの家はこの三人の中で学校から一番距離が近いので、拠点とさせてもらっています。

私服など何着か預かってもらっておいて、放課後にどこかへ出掛ける時は、ハヤの家で着替えてから……というのが通常なのです。

「今日も暖かいことですし、こんなものもいいかもしれませんわね」

キヌは箆笥から、青いワンピースを取り出しました。もちろんこれも、ハヤの部屋に預かって貰っているというだけで、キヌの私物

です。家では和服しか着ることのできない取り決めのキヌは、こうでもしないと洋服に袖を通すことすらままらないのです。

「夕方になれば冷えるからな。寒いと言っても私は知らんぞ」

「そうなたら、隼さんから衣を一枚頂戴いたしますわ」

「あ、だつたら私も頂戴したいです」

「ええい、便乗するなお古都」

彼岸花のように赤い振り袖を着たハヤは、短い髪との危うい相性が、どこか背筋を凍らせる魅力を持っていました。

「だって、私だけ通学着な袴のままなんですもの……」

それでも借金を背負った親の娘。一度知ってしまったからには、洋服や振り袖といった高価な服に身を包んでいる余裕はありません。女学校に通っていることですら、お父様が私の将来を思つて、のことなのです。無駄金はそうそう使えません。

「だから言っているだろう。わたしの服でよければ貸してやるぞ、と」

「わたくしも貸してあげますわよ」

「ありがとうございます。……でも、お気持ちだけにしておきます。ハヤの服は大きいですし、キヌの服は、その、身体がさらされるので……恥ずかしいです……」

私は頭を俯かせ、脚元を隠す柔らかい壁を、恨めしげな目で睨みます。

「胸は女性らしさの象徴ということで、わたしはもつと見せてほしいのだがなあ。男に見せるのが嫌なら、せめてわたしだけ、ぐらいには」

そう言つとハヤは、手の形を、ちょうど私の胸と同じ角度に婉曲してきました。

たらつと、一筋の冷や汗が私の額を流れます。ハヤの一挙手一投足を見逃さないようにじりじりと後退しながら、少しでも視線をキヌに超越し、援軍を要請します。

「隼さん。いくら美古都さんの胸はとても柔らかくて、触っている

だけでも幸せになれるからといって、そうわたくしの目の前でおかしな気を起こさないでくださいます？」

「いえ、そうじゃない、キヌ、助けて！」

「遅い！」

あーれー。気分は代官の元に寄りこされた町娘。

「——うう……なんで私は女性に……。私はエス小説は読めますが憧れてません……」

母屋の廊下を、私はめそめそ泣きながら歩きます。

「わたしは大層満足したぞ」

「なにも見ておりませんわ。ええ、わたくしはなにも見ておりませんわ」

笑っているハヤとキヌ。しかしその笑顔の理由は、全くの別物でした。

「オッス、お嬢さんたち！」「お嬢さん！ 今日もお綺麗つす！

肌も餅みたいつす！」「お嬢さんたちはお出かけつすか！？」「……

……お嬢さんはどうしてお泣きで？」

私の悲しみを吹き飛ばしてしまいそうな、とても威勢のいい声。

日下部道場の門下生さんたちです。……しかし、私よりも年上の男性から姐さんなどと呼ばれると、なんだかとても不思議な気持ちになります。

日下部道場には、ちょっとした標語が掲げられています。『男たるもの女のために。女たるもの男のために』です。男は守る場所があるから本気で戦うことができる。女もそんな男のために戦わねばならない。これは戦いだけでなく常日頃から使えるということ、ハヤはお気に入りのようです。そのおかげなのか、ハヤは自ら剣を握りながら、こうして華やかな装いをして、門下生たちを喜ばせたりしているのです。このせいで、ハヤの男性とも女性とも一口には言い切ることができないこの性格が形成されたのだと私は思っています。

「ふふ。みなさんも頑張って下さいね。応援してます」

ハヤから受けた傷も少しだけですが癒えてきました。今ではほら、笑うこともできます。

「お、オッス!」「頑張ります!」「いつか俺は最強になってみせます!」

そう言つて門下生さんたちは、「うおお!」と叫びながらドタドタと道場へ入って行きました。私なんかの言葉で嬉しくなってくれる人がいる。嬉しさは巡り、私へ帰還します。

「いい人ですね。日下部道場の人たちは」

こんな人たちに囲まれているからこそ、ハヤはここまで女性と男性の境目となる細い橋を、安定性を持って渡ることができているのでしょう。

「お古都。お前、男には滅法強いよな」

「ええ。わたくしたちの中ではもみくちやにされる立場にいますのに、こと男性の前となると、ここまで自然体を振る舞えるのです。う。こんな時に、わたくしは美古都さんが同一人物なのか疑問となつて仕方ありませんわ」

「……………? そんなつもりはないんだけど」

「しかも自覚なし。これがあれか。魔性の」「女、ですわね」

たしかに本格的に男性が苦手でしたら、使用人の真似事のようなことは決してできないでしょう。ですがまあ私としましては、我自権先様以外の男性は意識する意味ありませんし。その我自権先様だつて、楽しんで文通させてもらっているわけです、

私が苦手な男性は、純粹に嫌いな方でない限りは、いないんですよかね。

コースはいつも決まっっていて、本屋などを巡りながら街中を歩きまわり、最後には私の家でソーダ水を飲んで、日が暮れる前には別れる。そんな感じです。なので私たちはまず手始めに、本屋へやってまいりました。

面白そうな本で、自分が好きそうなもの……そんな風に辺りをつけ、何冊か手にとってぱらぱらと出だしの部分を読んだり、タイトルを見て面白そうなのを見繕っていると、

「うゑあ新刊」

「婦女子にあるまじき声ですわよ美古都さん」

時間を掛けてゆっくり見る予定でしたのに、すぐに読みたい本を見つけてしまいました。題名は『雑穀』ですか。この作者の小説は全て覚えています。そんな私がこの題名を知りません。間違いなく最近出たばかり、ピカピカの新刊です。作者……つまり、「我自権先」様。

いつ単行本を出版するのか教えて下さらないので、私は本屋へ足を運ぶ度、落胆したり、こうしてとても嬉しくなったりするのです。意地悪な方です。

「お古都は本当、我自権先のことになると眼がないな」

「だって好きなんだもん。しょうがないじゃない」

「子供っぽいですよ」

私が我自権先様のことには目がないことを知っている二人は、私を気にすることなく、すでに少女の友を買っていました。いえ、それだけではありません。少女界、少女世界、少女画報、少女倶楽部……およそ少女と名が付く雑誌はほとんど購入しているのではないのでしょうか。主にキヌが買います（キヌの家はこういった雑誌を嫌うので、キヌが読み終わった後は私とハヤが、それぞれ譲り受けま

す）

こうして本屋で用を済ませた私たちは、きやつきやうふふ、他にもいくつかお店を歩きまわります。まあ、いつもと大差のない、それでいてとても楽しい放課後です。

……そう思っていたのはどうやら、目の前にいた二人の男性の姿を認識するまででした。

「やあ美古都ちゃん」「……ふん。『小娘』が『小娘ども』に増えおった」

まさか、こんな時に会ってしまうとは。

「そんな理由から、貴女は先書粒子が好きなのだと？」

「あのお方の作品は、至福の一言に尽きまして！ クロツク様は分かっただけ——」

大人の、それも男性の、しかも顔立ちが端正な方と話があうなんて、キヌには有り得ないことなのでしょう。先ほどから興奮しっぱなしで、本屋で私を諫めた姿はどこにもありません。ハヤが押さえるに回っている始末。

先ほど宗司様から、「金字の正体を明かさないうちにねい」と耳打ちされました。確かに、キヌのように先書粒子に尊敬の念を抱いている女学生が、その本人の姿を見てしまえば、主に性格の方面で卒倒すること間違いなし。アルビノ体質な先生は、小説の登場人物のように神秘性を感じさせるのですが、肝心な見た目と性格の差ときたら筆舌しがたく。

ばったり先生と宗司様に出会った私たち一行。宗司様の勧めにより、甘味処へ寄り道をすることにしました。美味しいと評判なのでいつかは行ってみたいと思っていたのですが、今日やっと来ることができました。けれど——何故でしょう、嬉しくありません。

「——言うておくが、わたしは貴殿の内に潜む、葛藤のようなものを恐ろしいものだと思っている。そしてその葛藤とは、いつかは外へ弾ける類のものだ。その時になってお古都に牙を剥かれては、困

るのだ。だからわたしは、貴殿の下にお古都を置きたくない」

「葛藤をされていて何が悪い。人間など所詮、悩みが尽きぬ生き物。万事が思い通りになるという楽観的な考えを持つ若者こそ性質が悪い」

「貴殿はそれを逃げ道としている」

「赤目の俺と三白眼な貴様。どちらがこの小娘を裏切るのに足るものか」

「今さら、お互いの気にしているところを刺激しあうのか。わたしは貴殿の病魔のような白には触れないようにしていたのになあ？」

おそらくそれは、この空気のせいでしょう。間違いようがありません。

一つのテーブルに五人がいます。それはかまいません。

問題は、対面に座り合ったキヌと宗司様はすっかりと二人だけの世界に入ってしまったって、私たち三人を放置してしまっていることです。私は先生と和やかな世間話などできませんし、何度試みても上手くいきません。先生は他人という存在そのものが嫌いな方。ハヤはそもそも私たち以外の人とは会話を成り立たせようとすらしません。

仕方なく、私はオレンジ色のソーダ水を飲んで、少しでも間を持たせようとします……が、そんなことで和むのなら最初から苦労などしているはずもなく。

もしもこの席から立ち上がって、赤の他人の振りをできたら。「あの席ってなんなんでしょう。方や恋人同士のように仲睦まじく、方や喧嘩まった中……どうして相席をしているのでしょうか」などと思えるのでしょうか。

「できれば、この席は穩便に済ませてもらうと私としましては有難いのですが……」

あまり不審な態度をとっては、私が先生になにかされたのかと思うかもしれませんが。昼休みに言っていたように、私を養子にするよう両親に打診するぐらいはしてくるでしょう。……それでは困るの

です。なんとかして、二人に先生の人畜無害を認めてもらわなければ。

宗司様経由でキ又はなんとかなりそうですが、問題はハヤ。これなら、いつそ黙っててくれた方がありがたかったです……。ただでさえ敵を作ろうとするハヤですが、今のハヤは少し違います。第三者へ対し、とても饒舌になっています。こういう時のハヤは、なにかを守ることに必死なのです。

「隼という名前をしているかと思えばその通りだな。女学生という一介の小娘であるのに名は体をよく表す。油揚げでも浚ってみるか？」

「隼って、油揚げを食べるのでしょうか…… 鳶も本当に食べるのかわりませんが」

「ならわたしは、門の前で餌を待っている雀を脅すでしょう。なに、例え雲の上を飛べるほど強い翼を持っても、鷹の前では所詮、小動物に過ぎん」

「もはや隼なのか鳶なのか鷹なのかどの猛禽を指しているのか……」
場を和まそうと合いの手を入れてみるのですが、効果のほどは。そもそも、どうしてこんな比喻だらけの会話が成立しているのでしょうか。先生が日本語を間違えて使うことなどないはずですから、意図しておかしな表現にしているのでしょうか。ハヤもハヤで、何が言いたいのでしょう。多分、本人も分かってないと思います。何を争っているのか私には分かりませんが、ここは治めておきませんと。完全に力不足ですが、少しでも介入しようと試みます。

「お待たせしました」

ですが、そんな心配よりも、もっと良い中断方法が現れました。ちょうどいい場面で、給仕さんが私たちのテーブルへ、パフェを置いてくれたのです。

三角錘のガラスの器に、ぎっしりとフレークやカステラなどを土台に生クリームが層を作っていて、フルーツが元氣よく立って器の淵を彩っているというものです。高さは何センチあるのでしょうか。二人の間に置いたら、お互い顔が見えなくなってしまうほどの大きさです。

「うわ……噂通りですわね」

「うむ。これは確かに、一人で食べるには大きすぎるな」

「とっても、美味しそう……」

先ほどまでの行動を中止してまでも、私たちはパフェの虜になってしまいます。

「ははは。僕の話術をもつてしても、甘味の魅力には勝てないかあ」
「……どうして俺は、この小娘らが喰っている場面を観察してないければならない」

「いいじゃないか。滅多にない経験だろう？ どうせ君は、若い女と接点なんてほとんど持たないんだし。いいじゃないか。このぐらゐの出費で女学生の笑顔を見られるというのなら、安すぎる買い物だよ」

「俺は一度もほしいと思ったことはない。詐欺にあつた気分にはかならん」

「またまた。美古都ちゃんの喜んでゐる笑顔なんて、君には一条の光だろう？」

「……………。俺では七君を笑わせることなどできん」

パフェに夢中になっている私たちの耳に、男性陣の会話も届きはしませんでした。

「で、お古都。今一度聞くが、この殿方は一体、誰なのだ」

また元に戻れたのは、すっかりパフェが私たちのお腹に収まった後。この時には、それぞれ個別に当たるのではなく、男性陣と女性

陣という括りに別れてくれました。

しかしさすがはハヤ。「武道家とは自分の周りを『円』で囲むものだ」と、ハヤから教わったことがあります。ハヤが形成している円は、ちょうどこのテーブルを包むぐらいの大きさ。この範囲に入ってしまったら、どこへ身を動かそうが、均一に重圧がかかっています。つまり、なんでか私までぴりぴりした空気に晒されています。

「口を汚しながら言っても迫力がありませんわよ」

……ハヤの顔を見なければ、ですが。

「ほら、こんなところまで汚して……きちんとしてくださいな。淑女たるもの、普段から粗相しないよう気をつけませんと」

「うるさいなあお絹は。戦場でそんな悠長なことを言っていられるか」

「戦場と舞台を設定したのはハヤなのでは……」

ほとんど放置されているも同然な先生と宗司様。先生はいつにもまして無表情を保ち、宗司様はなんだか笑いそうなのを堪えているよう。時折、ぴく、ぴくと震えています。

「面白いなあ君たちは。女三人よれば姦しいってやつか。いや、この華やかさは金字の小説にはない、瑞々しいものだねい。くつくつく」

……たしかに先書粒子こと先生の作品は、あまり大勢の人が場面に登場しません。下手をすると、長編でも台詞のある登場人物が主人公とヒロインしかないこともザラ。現実の女性にありがちな、こうした騒がしさとは無縁なのです。やはり、様々な点において先生の小説は所詮、小説でしかないのです。

「ふん。女とは慎ましくあるべきだ」

「今様の女学生に、明治の常識を当てはめなくてくれよ金字。いいじゃないか。男性が隣にいただけで頬を赤らめ、はにかむ様を見るのもとても楽しいものだけれど、こうして社交的な女学生なら、席を共にできたりと全く別の楽しみがあるんだから。世の中という骨

は、しゃぶり尽くさないで損だ」

古風な先生と今風の宗司様。一般的には似た者が互いに惹かれあうといいますが、このお二人はどこが共通点なのでしょう。そのぐらい、対極の位置にいます。……あ、私たちが言えた義理ではありませんか。

「お言葉だが先生とやら。貴男は女性というものに多大な期待を持っているぞ。立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合のよう。この言葉はきっと、男が考えたのだろくな。現実はそうではない。可能ならば一度女学校へ来てみる。男の望みは儚くも無残に砕け散るだろう」私はハヤの言葉に、キ又と顔を見合わせて深く肯きました。思い当たる節が、残念ながら多すぎるからです。

「そんなことはない。小説の世界からはみ出ようが、理想な女というものは存在する」

……あら？ どこか先生のその言葉には違和感を覚えました。

「金字が明るい希望を謳うだなんて。君はもっと、暗い火の粉を振り撒かなきゃ」

ああ、そこでしたか。さすがは宗司様、先生のことをよく理解しています。

「僕は……そうだねい。やはり、有能な女性こそ魅力を感じるかな」「クロック様は、女性に能力をお求めで？」

「そうだね。はは。僕も所詮はただの男さ。大和撫子がいたら是非とも求婚をしたいね」

宗司様がそう言ったのを聴いて、キ又は素早くささつと髪を手直ししました。

「そしてやはり、今時は才色のある女性こそ魅力かな？ これからは女性だってもっと前線に立っていく時代だ。折角日本は亜細亜でもかなり発展しているんだ。欧米にだって並ぶことはできるだろう。英語のできる女性なんかは、需要が高まるのは自明だ」

女性としての責務は全て果たし、その上で社会に出ても通用する女性ですか。それはさぞ、有り得ないものでしょうね。

「ふん。俺たちは日本に産まれたんだ。どうして西洋にかぶれなければならぬ」

「では矛先を変えて、美古都ちゃん。君は小説家を目指しているだろう？」

「は、はい」

あまりの転身に、私は宗司様がなにを言いたいのかわかりませんでした。

「日本語を学ぶために英語を学ぶのも悪くないと思うけど？ 言葉遊びを好むのなら特に」

「何故です？」

一つ笑い顔を飛ばした宗司様は、スーツにポケットからメモ帳と万年筆を取り出しました。

「例えば、メロンとレモン。ヘボン式にしてみよう。『MERON』と『REMON』。MとRを入れ替えただけだ。それなのに片や砂漠のオアシスのように甘さが湧き出で、片や青春のように甘酸っぱい。日本語だけで考えては、決してこのような事実に気がつくことはない」

紙に書かれた二つの単語を見て、私たち三人は「おー」と小さな歓声を挙げました。

「ふん。江戸の町人でもあるまいし、そのような洒落を思いついてどうする」

「君は過去を美化するのか現在を賛美するか、どちらかにした方がいいねい」

「どうして俺がなにかの味方にならなければならない。俺が産まれるより前ならそれは化石であり後なら文化を破壊する侵略者だ」

「はっはっは。つまり金字みたいな頭の堅い奴には、大和撫子は勿体ないってことさ。そうだな、中屋敷さんのような美しい女性に質問したい。中屋敷さんは、もしこんな男が著名な作家だとしたら、どう声を掛けるかな？」

「もうクロツク様あ……お上手なんですから。うふ。……そうです

わねえ、それはそれで、納得できる気がしますわ。作家なんて、変人が多いと訊きますもの」

「お絹はどこから声を出してるんだ、どこから……」

聖歌を諳んじるように、甲高いキヌの美声。これで甘えた声を出せば、男性は骨抜きになっってしまうのでしょうか。キヌを見習わねば。

……というか、宗司様がそんな名前を名乗っていることなんて、すっかり忘れていました。

私は宗司様を宗司様と呼んでいますが、本当はクロックと呼ばれたいんでしたっけ。望んだ名前を、可愛い女学生に呼ばれた日には。宗司様の表情の筋肉も壊れるというものです。それでも優しい表情で押し留まるあたり、宗司様は典型的なナンパものです。

「ねえ。美古都さんもそう思いますわよね？」

「え、はい」

どうでしょう、その場合。

「僕も聴きたいな、美古都ちゃん。君はもし金字が高名な作家だとしたら、これまで金字と接したように、全く同じ反応を貫き通せるかい？」

宗司様はそう言つと、どうしてか先生が、宗司様を睨みました。

ええと……先書粒子は、有名ではありますが、高名とは到底言えません。ですが、仮に高名だったとしても、私の意思は、変わらないでしょう。

先生がどれほど私から遠い存在でも……すでに私と距離感を作ってしまったのです。もう、拒んだとしても私からは絶対に離れません。我自権先様のため、先生を利用すらして、徹底的に小説家となる力を蓄えるのです。

——私は、こんな私が嫌いです。

・
・
・

•

「……ふう」

こうして、外に出て太陽の光を浴びながらお仕事をしていると、額に汗がうつすらと溜まります。もうこんな時期なのですか。それにしても、今からこの調子では今年の夏は本格的に暑くなりそうです。

もう緑霊館にお勤め始めてから二か月近くになりますか。少しずつしかお掃除をできないのであまり綺麗になつた気はしませんが、それでも私が初めて訪れた、忘れがたきあの日から比べれば、格段にまともになつたはずですよ。はずなんです。はずなんですよ。

このぐらいを一人でできなければ、私は我自権先様のために働くことができません。

我自権先様から「小生の住処は無駄に広ひものとして整理もままなりません。少し歩けば埃がたつやうな廊下です。小生の面倒を見てくれるような女性がゐればすぐに片付くのでせうが」と言われたことがあります。私はこれを、つまり我自権先様はお掃除が得意な女性がお好きと判断し、日々こうして緑霊館で腕を磨く日々を送っています。

はてさて、ここまで頑張つたのですから、ほんの少しの休憩をば。ティーポッドと一冊の小説を持って、私はお庭へ出ます。日差しの下は避けましょう。ほどよく日陰でほどよく風通しのいい、中庭へ。緑霊館にお仕えし始めた当初から育て始め、今ではすっかりと芽生えた双葉を観察しながら、紅茶を飲みつつ、読書に耽る。

嗚呼、なんと贅沢な。

夏はあまり得意ではありません。どうも暑さで身体が弛緩する感じが、夏特有の気だたるさともいうべきものを冗長させるのです。……しかしここまで否定しておいてなんですが、好きではあるのです。風鈴の音色。緑の薫り。あいすくりんの美味しさ。どれをと

つても、風流を肌で感じる季節ですから。

というより、私に嫌いな季節はありません。苦手なだけなのです。嫌いと苦手。これは似ているようで、実は全くの別物なのだと、私は常々思っています。我自権先様にも手紙でお伝えしたことがあります。その時は「目から鱗が落ちました。さうですね。今度そのことを題材に一筆認めたいと思います」と返信がきました。我自権先様から誉められるなんて。しかも、私のなんてことのない考えが愛してやまない作家の題材にされるなんて。あまりの嬉しさに、私は数日の間、顔に締まりがないとお母様に叱られる毎日を過ごしました。

社交辞令かもしれないこの出来事でさえ、私はこれだけ幸せになつてしまうのです。そして数カ月後、出版された新刊を読んだで昇天しかけたことは、私を知る者なら誰だつて簡単に分かつてくれることです。

そして我自権先様は、私に決して嘘はおつしやいません。たまに間違つたこともあったりしますが、それは『知識を持ち合わせていなかった』だけであつて、『意図的に間違えた』わけではありません。悪意がないのです。

最近出版された最新刊、雑穀を読んでいる私ときたら。顔が火照つてしまいます。

我自権先様。どうして我自権先様は、ああまで私を揺さぶる天才なのでしょう。緻密にして繊細。私のためだけに書いていると錯覚してしまうほど計算尽くされたシナリオ。あの人に認められたいからこそ、私は小説を書きたいのです。

……これでは駄目ですよ。以前、ハヤに言われたことを思い出します。

『片恋をするのは勝手だが、それなら操は立てんな。その我自権先だつて、もしお古都がどこその小説家に技術を教わっていると知つたら、嫉妬の一つぐらいはすると思うぞ』

気むずかしい先生のことです。書いている題材からして違つとは

いえ、「私が好きな作家は、エス小説を書いている先生より、誰からも評価を受けていない無名な作家なのです」と言った日には、どのような拒否反応が返ってくるか。

「はは。これが花壇に咲いた一輪のお花なのかな？ 綺麗に咲き誇っているねい」

突如湧いた声に、私は驚いてそちらの方向を向きます。ですが、誰ということもありません。こんなナンパがするすると口を付ける私を知っている人なんて。

「まあ宗司様ったら」

小説に我自権先様から頂いた棗を挟んで、ひとまず椅子の上へ。緑霊館へ来館される唯一のお客様へ、使用人として応対することとします。

「いやさあ、可憐な花が庭に咲いていると思ったら、美古都ちゃんだったのかあ、ってね」

宗司様は柵から顔を覗かせながらそう言います。往路と家の敷地という、繋がっているようで分離してしまった世界。あたかも演劇私のような女学生なら普通は、このような状況に置かれてしまえば胸がドキドキしてしまうものです。

「お上手なんですから。先生風に言えば『小娘』な私を口説いてどうするのです？」

「ははは、あながち冗談のつもりではないんだけどね。単語というものは、使われれば使われるだけその価値はデフレーションしてしまうんだ。いつも誰かの世辞を言っている商人のお褒めの言葉と、決して褒めることのない職人のお褒めの言葉、そこに込められた重さは一緒なのかなあ？　って考えが僕にはあつてね。だから、思ったことは思った瞬間にしか口には出さない。僕が美古都ちゃんを褒めるのは、然るべき場面だからなんだよ」

つい先ほど顔を赤くしたのが持続したのか、まるで宗司様のお世辞に顔を染めたようになってしまいました。ああ、それもこれも、宗司様が悪いのです。宗司様のような優しい笑顔でお世辞を言われてしまえば、ハヤのように普通の女性ならば惚れてしまうというもの。

「ははは、なんだか、口説くのが先になってしまったね。改めまして。やあ美古都ちゃん。金字は居るかい？」

「はい。先生はいつも通り、書斎で執筆中ですよ」

「よかったよかった。ちゃんと仕事をしているようだね」

この曜日・時間になると、宗司様はスーツ姿に帽子を被り、トラ
ンクを片手に引き下げて、お屋敷へとやってくるのです。宗司様は
先生の編集者をしているというだけあって、公私に渡り、実に幅広
く先生の世話をしています。私が先生の使用人だとしたら、宗司様
は先生の秘書といった面持ち。その活動の一環が、日曜日に家庭訪
問、というわけです。

「近頃の金字ときたら、なかなか締め切りを守れなくなってるねい。
困ったものだよ」

「あら。先書粒子といえば、速筆も売りでしたのに」

「スランプってやつなのかなあ」

「そうですね。私も自分で書いているから分かるのですが、どうや
ったらあれだけの速度を維持できるのでしょうか。まあ、これまでに
早すぎたくらいだからねい」

最近の先生ときたら、題材探しをしている時間が増えているよう
なのです。おかげで私が緑霊館でお勤めをしていますと、ちよっか
いをかけてきますこと。

現に今も……私の上で降り注ぐ視線が……。

こう表現すると、まるで怪談です。しかし、本当に先生が私を睨
んでいるのですから、笑い話にもできないという。うーん。できれ
ば、宗司様を睨んでいるものと思いたいのですが。

理由が思いつかないところが、また厄介です。私がしていること
といえば、宗司様とちよつとした世間話をしているだけですのに。

「……………」

「そんなところで羨ましそうな目をしてるくらいだったら、降りて
きたらどうだい？」

まだこちらを睨んでいる先生へ向けて、宗司様は少し大きめの声
を出しました。

「なんだろうかなあ、あれ。天照するの。体質は言い訳にならない
し。締め切りが迫っても完成してなかったら、よく逃げまわってる

ような男なのにねい」

「以前までの先生は、そんなに仕事を抜け出していたのですか？」
女子が二人きりでひそひそ話するように、私たちは近づきあつて呟きます。

「んー、そうだねい。最近は目に見えて回数が減ったかな。どうにも金字は逃走癖があるようで。少しでも執筆の手が止まると、題材を探しに町へ繰り出すんだ」

毎週決まって『リーベ』へと顔を出していたのは、おそらく宗司様から逃げるための習慣だったのだと、私は想像しています。それ以外の可能性は……あの先生に限ってはないでしょう。確認を取ろうとしたところで、先生は正直に理由を明かしてくれるはずありませんし。

「もつとも、リーベは別の曜日に行くようになってしまったけれどねい。似非美食家のあいっだから。あのぐらい美味しい洋食を出してくれるお店は、それだけでも十分通う価値があるものなのだろうねい。美古都ちゃんがいなくても」

「まあ。有難うございます」

お店をよく言われるのは、無条件に嬉しいものです。

「いやいや。社交辞令じゃないよ。大体、大切な休日の看板娘を奪ってしまった僕は、どれだけ謝っても謝り足りないくらいだからね。できることとすれば、各々の方面へ、美味しい洋食店にリーベの名前を挙げて宣伝するだけさ」

「それはそれは。もうこれ以上、私はどう謝辞を言えがいいのですか宗司様に」

「はっはっは。世の中、持ちつ持たれつ、さ」

本当、宗司様とお話をしていると、世の中は全て繋がっているのだと思えてきます。

「いやー面白いよ世界って。何故にこうも、均一というものがないのだろうねい。……だからこそ、金字のような『異質』は、どうしても浮き彫りになってしまふのだけれどねい」

苦々しげに、そう言いました。宗司様はいつも先生のことを酷くおっしゃいますのに、自分以外の人間が先生をこき下ろすような態度をすると、こうしてとても怒るのです。

これが、男同士というものののでしょうか。

お互い、口では罵り合っていますが、心の奥深いところでは、結びつきあっています。これは、間近で見ている私だからこそ感じることです。おそらく、お二人は一生かかっても、私の気持ちに共感することはないでしょう。

「そつだ宗司様。私、これから少し休憩するつもりなんです。ここで立ち話もなんです。少し、お茶しませんか？」

「お、これ以上ないほど魅力的な提案だね。砂漠の水さ」

そう言つて笑つた宗司様は、勝手知つたる他人の家、「お邪魔します」の挨拶を除いては遠慮することなく、お屋敷へ入つていきます。私も宗司様の後に続きました。

リビングのテーブルの上には、原稿用紙の束が乗せられていました。一番上にはメモ用紙が貼り付けられていて、『今月分』と達筆な文字で書かれていました。

「金字は頼んだ仕事ならきちんとこなしてくれるから楽だね。こちらが下手に出る必要もないし、まさに僕の担当となるべき小説家だね」

遅い遅いと嘆いてはいても、期日通りに完成させておいた先生に、宗司様はご機嫌です。

「しかも、こんなに可憐な女の子がお茶を入れてくれるなんて……んー、僕はなんて幸せ者なのだろう」

「今日もほうじ茶でよろしいんですか？」

紳士然とした宗司様に、湯呑みと熱いお茶の組み合わせはどうにもちぐはぐな気がして……私はついつい、何度も聞いてしまうのでした。

「大いに結構」

「宗司様には紅茶の方が似合うと思ひまして」

「なあに、紅茶なんて英国に留学していた頃、浴びるように飲んだからねい」

その発言は、初めて聞きました。まさか宗司様、留学経験がおありだなんて。

さりげないことに、先生の素性が不明な以上に、こうして何度も

お茶をしあっているというのに、宗司様がどんな生い立ちをしてきたのかがまるで掴めないのです。

「やはり外国は、大層素晴らしいところなのですか？」

「んー、所詮は住めば都、なんだよねい」

宗司様はほうじ茶をテーブルにことりと置きました。

「僕はヤンデルという英国の家族に、書生のような暮らさせてもらっていて。いやー、あまり楽しくない毎日を過ごしていた。極東からきた猿なんかを、って扱いをされたさ。僕は負けず嫌いだから、そうやって僕を莫迦にするような輩は実力だけで押し伏せてきたけれどねい」

得体のしれない宗司様なら、やらかしそうなことです。

「でも宗司様なら、英国でも私と同じようにナンパしそうですね」

私はくすくす笑いながら言いました。

「ははは。そう言われたら痛いなあ。告白させてもらうと、向こうでは一人だけ恋人がいたなあ。その女性にしか、愛の言葉は呟いていなかったさ。むしろ英国といえば、あそこのメイドは独特な良さがあるねい。なんというか、日本の女中とは全くの別物だ」

軟派でそう間接的に私のことを褒めているのではなく、もっと単純にメイドという存在そのものが好きなようでした。こればかりは、宗司様の男性であるところが出ているのでしょう。

「これは金字も同じだけどね。あいつも可愛い女の子は好きなんだよやっぱり。良い伴侶と添い遂げたいと思っている。はは、やはり男といえど、恋に生きる生物なのかなあ」

「先生も？」

先生と恋は、間違っても結びつかない気がするのですが。

「何を言ってるんだい。金字がどんな小説を書いているのか忘れたのかい？　いくら嫌々だからと言っても、想像する余地がなければ、原稿用紙にインクを乗せることなんてできないさ。心の奥深くでは、ああいったことを望んでいるんだよ」

「ああ」

先書粒子。女学生に人気のエス小説家。そりゃ、恋の一つも知っているというものです。

「まあ僕は写実主義者ではないけれど、経験の伴っていない小説ほど間抜けなものもないと思っている。そこも金字と同じなのさ。僕と金字はこれでも似た者同士。……同じ相手に恋をしたという意味でもね」

「さぞや、熾烈な争いが繰り広げられてそうですね」

「さあ、どうだろうねい。忘れたよ」

……金字様や宗司様は、こうして自らの過去を、自分からなら明かします。けれど、私が詮索しようとすると、のらりくらりと逃げるばかり。

まるで、私をどこかに誘導したいみたい。

「あいつが人気なんだから、世の中は分からないよねい。ほら、生原稿を見てみるかい？」

「いえ」

断ります。キ又よりも先に読むと、何されるか分かったものではないので。私には、先書粒子に本気になっているキ又と、似非エス気を催しているハヤが、なによりも怖いのです。あれらだけには勝てる気がしません。

「……………」

宗司様は小さく舌打ちをしました。してから自分の行為に気が付いたらしく、誤魔化すようにお茶を一口含みます。「いやあ、うっかり舌を火傷しちゃったよう」などと言いますから、私も「もう宗司様ったら。意外におっちょこちよいなんですね」と言っておきました。

「先生つて、大抵は横書きで書きますよね」

私はメモ帳を見ながらそう言います。先生がなにかしらを筆記する際、縦でも横でもどちらでも構わない場合は、ほとんどが横なのです。

「ああ、これ。こういう癖なんだってさ、あれ。縦の動きに目が追いつけないみたい。アルビノにはよくあることらしいよ。だからいつそのこと、原稿用紙なんかは横書きで使っているのさ。どうせ校正するのは僕。僕と金字が読めればそれでいいのさ」

へえ。偏屈だから、以外の理由が存在するとは。

「やはり小説家には、独自のスタイルがあるものですね。武道などとは違って、これと云った型が存在するわけではありませんから、仕方がないのかもしれませんが」

「美古都ちゃんはどうやって原稿に向かっているんだい？ ……いや、そもそも僕は美古都ちゃんがどんな小説を書いているのかすら知らなかったなあ」

「そんな大層なものではないですよ。私の好きな作家は『自分の経験が生きるうちは、忘れないようにどこかへ書き留めておくべきです。小生はそれができなかったから、こうして乾燥した小説しか書けません』とおっしゃっていました。私はまだ女学生ですので、いきなり大作を作るうなんて考えたりしていません。せいぜい、私の学友との経歴を少し脚色しながら書いているぐらいです」

「ほほう。それはそれで興味が湧くねい。貴女たちは一筋縄で行きそうにない親愛を持っていそうだから。あれがエスの世界……と言ったら、少々女学生に夢を見過ぎかな？」

「私たちはエスというよりは、どちらかと言えば宗司様と先生の関係に近い気がします」

「へえ」

ニヤリと、宗司様は笑いました。にこりではなく、ニヤリ。

「つまり、一悶着以上あったわけだ」

「そんなところですね。本来なら私たち、嫌いあっていたぐらいですから」

今では、「そんなこともありましたよね」と笑い話にすることしかできませんが。

「正直、やや枯れ始めた僕らには眩し過ぎたね、あのトリオは。実は街でばったり会ってパフェを食べに喫茶店に入った日、美古都ちやんたちの姿を、結構早い段階で見つけてはいたんだよ。ただ金字が、頑なに近づこうとしなかったから。女学生のかましい姿を眺めているだけだったのさ。僕は眺めてるだけなんて嫌だから、ああして我慢できなくて美古都ちやんに話しかけたんだけど」

「あれ？ そうだったのですか」

氣を使ってくれた……というのはなさそうです。まあ先生と宗司様をキヌとハヤに会わせたくありませんでしたから、どんな動機であれ、先生を打ち破った宗司様を恨まないといけませんですけど。あれ以来、事あるごとに「悪の手先から美古都さんアンドお古都を守る方法」という相談を手紙でやりとりしているそうです。あの二人、冗談なのか本気なのか私でも判断できません。

「あれが美古都ちやん本来の笑顔なんだなあって思ったよう。僕らの前では決して見せることのない輝き。まるつきり性格の違う、それなのにぴたりと嵌ったように息が合っていた。表も裏も全て曝け出せる、本当に信頼できる友とは、ああいったものを差すのか……と、僕はこう思ってたんだけど。金字はちよつと未知数だね。」

あの瞳は、なにを考えていたやら」

やはり、客観的に見ても、私たちはちぐはぐなのですか。……おそらく、第三者が思っているのと、私たちが思っているのでは、それぞれの役回りが大分食い違っているのでしょうか。

それだけ、外面は演技で凝り固まっているのです、私たちは。「人間なんて、誰にも明かさない部分が存在するんだ。僕にだって

知らない金字の一面がある。美古都ちゃんにも。……あいつはダイナマイトを抱えているからねい。それこそ、美古都ちゃんが知ったら失望するほどの。いつ導火線に火を点けることやらか。それどころか、導火線の所在すら、僕にだって予想が立たない。僕としては、腐れ縁が不幸にならないよう、精々ちよっかいを掛けることぐらいしかないさ」

爆弾。そんなものは、私にだってあるのです。

「私の望みは先生が少しずつ私に心を開いてくれることですから。宗司様の横槍はいりません」

「嫌われちゃったねい。あはは。金字に慰めて貰おうかなあ」

「私としては、宗司様の方こそ不思議で仕様がありません。先生のような分からず屋と一緒にいて、よく愛想を尽かせませんね」

「美古都ちゃんも存外、決るよねい。あっはっは」

私が見ている限り、先生と宗司様は顔を合わせるたびに何かしら口論をしています。その多くは答えもない取り留めのないことばかり。よくも飽きないものです。ほとんどは先生が口火を切り、宗司様が上手くいなしているうちに先生が押し黙ってしまうという展開ばかりですが。しかしたまに、先生が反撃に出たまま、宗司様が全く反論できないでいることも、私はしばしば見してきました。

「友人なんてそんなものだろうなあ。一から十まで許容のできる友人——これは恋人と置き換えてもいい——は、いないものさ。どこかしら、不満な点を抱えてしまふ。しかし、どれだけその不満という荷物を背負うことができるかによって、結局その人を友人と認めることができるのだろうねい」

身近な例を出してみれば、私はやはりキ又とハヤが浮かんできません……といいますかそれ以外は浮かびません。こういうところが、きっと私の冷たさなんだと思います。

キ又は高飛車なところ、ハヤは感情を殺そうとしてしまうところが、私はあまり好きではありません。あの二人に限らなくても、例えば目の前にいる宗司様。私は宗司様の全てを悟っているような目が好きではありません。更に言えば、先生ですらあまで内に引きこもることを、私は良しと置いていないくらいなのです。

けれどそこを含めての「人間」なのです。なくなってしまうえば、それは単なる人形です。私が気持ちよく生きるための道具でしかありません。人間らしさが表出しなくなってしまうです。

「……しかし、どうせなら、金字に是非そのエピソードを話してやってくれよ。あいつなら、きっと小説の題材に使ってやれるよう」

「私が先書粒子の主人公に？」

「それも、いいかな」

宗司様は、『も』を強調しました。あからさま過ぎるほどに。

「金字曰く、小説家というものは所詮、誰かに認められたいから、その不特定の誰かに向かつて執筆するのだとか。金字はそのために文机に向かっているとあるからねい」

「つまり先生は、エス小説の読者を対象とした、女学生に認められたいと？」

「いんや。金字は、『七君』のために筆を握り続けるのさ」

七君。以前、先生がそんな単語を口走っていたことがありましたっけ。

「おや？ 七君とは誰だという顔をしているねい。美古都ちゃんも先書粒子のファンとして、少しは気になるかい？」

「いいえ、そちらはどうでもいいです。ただ、あの先生が、女性のためだけに執筆をするだなんて、少し現実味が薄くて」

「どうして女性かと？ 僕は性別までは特定できることは何も言わなかったけどない」

それは。

先生は私を見てくれません。私の向こうにある、消失点しか見つめてくれないのです。

倉持美古都という、女の向こうに。

「……………。訊いてもいいですか？」

「七君の詳細を、かい？」

私が疑問を口にするよりも先に、宗司様は私の先読みをしていました。

「ふっふっふ。僕を舐めない方がいいよう？ あの金字と美古都ちゃんが生まれるよりも前からのつき合いをしているんだからねい」

「あ、この説得力にかなう別の例が思いつきません……………」

それほど私にとって、先生は日頃から何を思考しているのか、全く読めないのですから。

「七君か。美古都ちゃん相手なら言っても問題はないだろうけどない」

先生の肌は、欧米人よりも更に白く、どの季節であろうが雪を連想させてしまいます。私はかような肌をみたことはありません。

「まあ知っておいて貰った方がいいかもねい。表向きは使用人として雇っているわけだし。主人の秘密を握ったメイド、か。ふっふっふ、なかなか甘美な響きだとは思わなにかい？」

「思いません。先生が自らの意志で明かそうとしない秘密など、握りたくありません」

私は心の芯がすうつと冷えてくるのがわかります。

宗司様のこういう部分を、私は――。

「七君はね。金字が小説家となつてからの、第一号のファンなのさ。当時、金字は全く名が上がってなくてね。そんな折にぽつと現れた北極星。金字はすぐさま、七君を喜ばせるために小説を書き始めた。正体すらまともに分からない彼女のために、ね」

「分からない？」

「んー、住所は書いてあるんだけど、名前は書いてないんだよない。そもそも、七君って言う呼び名も仮のものだから。僕らがそう呼んでいることを向こうは知らないはずだよ。名無しの君。略してななきみ、『七君』」

ああ、どうりで。『私こと倉持美古都』のような部外者に、知らせるはずがありません。

私はお給金を貰えるだけでなく、先生を間近で見られるからこそ、この御屋敷で働くことに決めたのですから。

「女の片思いは、本人がヒロイズムに浸れる分まだいいね。男の片思いほど、辛く、厳しいものはない」

宗司様はお茶を実に渋そうな様相で口へ含みますと、ちょうど三時の時計がボンボンと、緑霊館を不気味に彩りました。

「ああそうだ。その『使用人』たる美古都ちゃんに、頼みたかったことがあつたんだ」

「なんででしょうか」

「金字の書斎を片付けてくれないかな？ 丸めた原稿用紙で地面が埋まってしまうという体たらくでね。床に散らばったものと、埃はちよいちよい叩いてくれればいいから。原稿用紙は放置でお願い。僕さ、あいつの筆が遅いのって、多かれ少なかれ、部屋が汚いからって思ってるんだよね。金字がなにか言ってきたても、僕のせいということにしておけば、納得するからさ。これからあいつとちよつと出かけるから、その間に頼むよう。終わったら時間も時間だし、鍵をかけて帰っていいからさ」

「かしこまりました」

そのような理由とあつては、使用人として最大限に働かなくては
いけません。

「有難う。ほんと、美古都ちゃんはこの館の女神様だねい」

「いえいえ。私から清掃を除いたら、やれることがなくなってしまう
いますから」

なんのかんのといって、先生から小説の技法を学べているのです。
先生はあれでも小説家。文章を原稿用紙に纏めて提出しますと、赤
い筆で添削してくれたりもするのです。簡潔な文章で評判な先書粒
子。どうも回りくどい表現になってしまったりしたときなんかは、
ざっくりと切ってくれたりして、とても勉強になります。

我自権先様はお世辞にも簡潔な文章とは言い難いですが、まあ尊
敬するからと似せる必要もないかと思えます。私は私の考える小説
家になりたいものですから。

「ですよねえ、先生。相変わらず私の仕事を奪うのですから。少し
は私にも、先生のために働かせて下さいよ。楽しくてやってるんで
すよ、私は」

書・

私は宗司様に頼まれた通り、書斎へ脚を踏み入れます。先生を宗司様がリビングへ誘導している今が好機なのです。

ここが、あの先生の本拠地。そう考えれば、自然と気力もわいてくるというものです。

【小生は筆が走っていれば書斎からまず出ません。おかげで床には原稿が散乱するばかり。畳が墨で黒くすらなっているのです。君のように家事のできる女性が細君に来てくれればと何度思ったことか分かりません】

あの方はそんな風に申ししていましたのに、先生の書斎は想像したよりも綺麗でした。

と言いましても、もちろん埃は溜まっていましたし、空気は淀んですらいいます。私にとっての書斎というイメージとは、あの方の描写通り、丸められた原稿用紙が無造作に捨てられた部屋です。屑力ゴがあるのですから、そちらに捨てればよろしいのに。「こんなちまちましたところに捨てられるか」とか、そういったことでしょうか。

初めて見た作家の部屋はいかにも男性の部屋といった趣でした。洋館であるのですから、大きなデスクがあるのはなんの間違いでもないのですが、同時に黒の光沢がある文机まで置かれているのは、いかにも先生の気難しさを象徴している気がします。どちらを使っているというわけではなく、両方とも使っているようです。デスクにも文机にも原稿用紙が散乱しています。

私はデスクに適当に散らかされているようですが、おそらく先生にとっては法則をもって置かれている原稿の、一番上の一枚を手に取りました。【向日葵時代・二十三】とあります。一番人氣のシリーズです。その最新話。つまりこれが、あの有名作家の生原稿。キヌ辺りが見たら泣いて失神しそうです。誇張では断じてなく。

「……………」

どうして先生は、原稿用紙を縦にし、英語のように横書きをしているのでしょうか。横文字を使うなど言っているのに、自分は文字を横にしているのですか。よくわかりません。

……というより、こんなことをしている暇はありませんね。興味が強く惹かれますが、今は宗司様のご命令通り、掃除をしませんと。……ああ紛らわしい。掃除と宗司。

箒とハタキを持ちだし、どう掃除をしていこうか検討を付けます。原稿用紙を捨てたりしたらまずいでしょう。そちらには手をつけないように。

まず家具の埃取りといきましょうか。日頃から宗司様が部屋全体を軽くなら掃除してくれているようですが、こういうのは「やる」と意識を持たない限り、なかなか手が回らない場所でありますから……まあ家具と言っても、デスクと文机の他は、本棚しかないのですが。

先生が先生である証は二つの机に現れています。先生が作家である証は、本棚に集約されていると言っても過言ではありません。そのぐらい、書斎は本棚の森です。下手をすると、窓でさえも本棚で隠されようとしている始末。日差しが嫌いな先生ですから、完全に閉じ込めてしまおうとしたのでしょうか。それは宗司様がお止になったと。容易に想像できます。

本の大半は外国からの輸入品でしょうか。少なくとも、日本語ではありません。英語もありますし、漢字ばかり……つまり中国語ですね。他にも、フランス語、ロシア語……ありとあらゆる国の本が並べられています。

その中でも異色を放っているのが、先生が先書粒子として出版なさっている、これまで全てのエス作品。どれもこれも、キヌの部屋の本棚で見たことがあります。

「――！」

玄関の方から、叫び声が、こんなところまで響いてきました。

「——！——！——！」

僅かな空白があることから、先生が誰かと言い争いしていることは分かりました。先生がここまで声を荒げることも珍しいものです。原因は、まあ……そういうことですか。

ドン、ドン、ドン。大きな足音をたてて、何者かがこの書齋へ一目散に近寄ってきます。書齋の目の前で音が止んだかと思っても、その静寂の刹那は一秒も満たしません。

「おい！」

扉をバタンと痛めつけるように開けて部屋へ入ってきたのは、当然ながら、先生。普段あまり運動をしないのに走ったからか、かなり息を荒げていました。

「小娘、お前、どうしてここにいる！」

「いえ、その、宗司様に頼まれまして。執筆に支障が出るほどだから。最近筆が遅い原因は汚いからだとかで」

「宗司の奴……！」

「待ってください先生」

踵を返してまたリビングへ戻ろうとする先生を、なんとか

「先生に無断で書齋へ踏み入れたのは謝ります。そして、宗司様を責めないでください。全てはそれを受け持った私の責任です」

「違う俺が気に食わないのはそこではなく、俺の素性を暴こうとする宗司の——」

そこまで言ってから、しまった、と顔をそむけました。

「原稿は見てなかるうな……！？」

「文机の方には近づいてすらいません。ですから、見られませんでした」

「……………！」

「あの、先生……？ 文机の原稿には一体、何が書いてあったのです？」

「うるさい！ お前には関係あるものか！」

そう言って身体全体で文机を庇って隠し通そうとした先生は、子供そのものでして……私には、到底それが、大人の姿だとは思えませんでした。

「やっぱりこうなったか」

後からゆっくりと参上なさった、宗司様。余裕綽々の笑み。

「ああ、ありがとうね美古都ちゃん。掃除はしっかりとやってくれたみたいだ」

その言葉は本来なら適切でありながらも、この状況では最もそぐわないものに映りました。

「後のことは僕が引き継ぐからさ。僕の仕事だ。美古都ちゃんはこいつを放っておいて、帰ってくれないかな。金字も、美古都ちゃんに情けない姿は晒したくないと思うからねい」

こう言われて、尚も口を開かない先生。私にできることは、ただ宗司様に従うだけでした。

「宗司様。一つだけ、お願いがあるのです」

「うん？ なにかな。僕は自分の可能なことなら、どんなことだって叶えてあげるよう」

大人として、嘘偽りのない純粋な社交辞令。

でしたら私も、子供として、嘘偽りのない純粋な敵意を剥くまで。
「これ以上、先生を苦しめないください。私は嘘つきが嫌いなんです。私の一番嫌いな人間が私自身だということで、少しは汲み取って下さい」

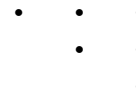
「あつはつは。ごめんね美古都ちゃん。それはね……——無理なんだよ」

私は宗司様によって背中を押され、無理矢理に部屋を追いだされてしまいます。ガチャン、と硬質な音が小さく鳴ります。

私が部屋を出る時に、見逃さないものが二つありました。

一つは、先書粒子の作品のように、整頓された……それでいて、片隅においやられた、我自権先様の全発行作品。

そして、文机の上に置かれた……私の、手紙。



PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0083y/>

我流自権先

2011年12月17日18時49分発行